宮城県文化財調査報告書第113集

塩釜市新浜遺跡

－塩釜漁港第７次整備計画及び港湾整備特別会計事業関連発掘調査報告－

昭和 61 年 3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

松島湾は日本三景の一つとして全国に知られておりますが、考古学の方面では東京湾・霞ガ浦沿岸とともに日本三大貝塚群の一つとしても有名です。その沿岸や島嶼には多数の貝塚とともに縄文時代から平安時代にかけての塩生産に関わりのあった遺跡が多数分布します。松島湾の小さな浜辺に立って、波打ち際を注意すると、赤褐色の小さな土器片が点々と落ちているのに気がつきます。これは古代の人々が塩を生産するために、海水をいれて煮沸した時の土器の破片です。奥州一の宮として名高い塩釜神社は松島湾に沢山の製塩遺跡を残した古代の漁民の信仰をあつめ、共同祭祀されたものから発展したものと考えられます。このように松島湾は自然景観が優れているだけでなく、それと融和して存在する多数の文化財があり、歴史的環境を良く保全している地域であることにもっと注意して良いと思います。

今回報告する新浜遺跡も松島湾に分布する製塩遺跡の一つで、調査によって縄文時代･奈良時代の製塩遺構、江戸時代後期の製塩遺構(あるいは貝灰生産遺構)、明治時代の貝灰を生産した遺構などが検出され、東北地方の漁業史に重要な資料を提起することが出来ました。

最後になりましたが、調査にあたって多大なご協力をいただいた関係機関の皆様に厚く御礼を申しあげます。

昭和61年3月

宮城県教育委員会

教育長　郷　古　康　郎

例　　言

1．本書は宮城県水産林業部（担当、宮城県塩釜漁港事務所）が計画した塩釜漁港第７次整備計画及び港湾整備特別会計事業に伴う新浜遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、宮城県水産林業部（担当、宮城県塩釜漁港事務所）から依頼されて、宮城県教育委員会が主体者となり、文化財保護課が担当した。

3．工事に係る埋蔵文化財保護のための協議や発掘調査にあたっては宮城県塩釜漁港事務所や塩釜市教育委員会から多大のご協力があった。また、報告書の作成にあっても塩釜市教育委員会から色々な点でご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。

4．本書における土色についての記述には『新版標準土色帖』(1973 年) を利用した。

5．本書の第１図は建設省国土地理院発行の 1/2.5 万地形図「塩釜」・「松島」を複製して利用した。

6．本書は調査員全員で協議しながら執筆し編集した。

7．発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品については宮城県教育委員会が保管し、もとめに応じて公開している。

調　査　要　項

1．遺跡名　　新浜遺跡Ａ遺跡（遺跡記号　ＨＵ、宮城県遺跡地名表番号 11048）
　　新浜遺跡Ｂ遺跡（遺跡記号　ＨＷ、宮城県遺跡地名表番号 11049）

2．調査期間　　発掘調査ー昭和59年7月24日～9月29日、昭和60年6月14日～6月27日
　　整理・報告書作成等ー昭和60年9月～昭和61年3月

3．調査対象面積　Ａ遺跡　650㎡、Ｂ地点　400㎡

4．発掘調査面積　Ａ遺跡　400㎡、Ｂ地点　300㎡

5．発掘調査主体者　宮城県教育委員会

6．発掘調査担当者　宮城県教育庁文化財保護課
　（昭和 59 年度）　調査員：藤沼邦彦・加藤道男・丹羽茂・斎藤吉弘・佐藤裕志
　　庶務　：岩住昭矩・岩崎栄一・鈴木ちえ子
　（昭和 60 年度）　調査員：藤沼邦彦・加藤道男・真山悟・阿部博志・佐藤則之・笠原信男
　　庶務　：岩住昭矩・曽根　章・鈴木ちえ子

7．発掘調査協力機関　塩釜市教育委員会・宮城県塩釜漁港事務所

8．発掘調査協力者　　井城信広・本田幹枝・高橋守克・佐藤好一・後藤勝彦

目　　次

Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1
Ⅲ．新浜A遺跡の調査内容 …… 3
　１．基本層位 …… 3
　２．遺構とその出土遺物 …… 4
　３．包含層からの出土遺物 …… 9
　４．考　察 …… 10
Ⅳ．新浜B遺跡の調査内容 …… 13
　１．基本層位 …… 13
　２．遺構とその出土遺物 …… 16
　３．遺物包含層からの出土遺物 …… 24
　４．自然遺物 …… 36
　５．考　察 …… 37
Ⅴ．まとめ …… 39

Ⅰ　調査に至る経過

宮城県水産林業部は、昭和 57 年度から塩釜市新浜三丁目地内に於いて、塩釜漁港第７次整備計画及び港湾整備特別会計事業として漁港工事を推進していた。ところが、昭和 57 年 12 月、塩釜市教育委員会と文化財保護地区指導員（高橋守克氏）が文化財の定期パトロール中に、工事予定地内で塩生産に関係すると思われる遺跡を二ケ所で発見し、市教育委員会から文化庁長官あて遺跡発見届が提出された。これが新浜遺跡のＡ遺跡・Ｂ遺跡である。そこで宮城県教育委員会（文化財保護課）と塩釜市教育委員会は宮城県水産林業部（宮城県塩釜漁港事務所）と埋蔵文化財保護のための協議を行った。しかし、工事の変更は困難で、遺跡所在地の埋め立ては避けられないとのことで、事前に発掘調査を行うことが決定された。このため、宮城県教育委員会は、宮城県水産林業部長からの依頼に基づき、昭和 59 年７月～９月と昭和 60 年６月の２回にわたって、塩釜市教育委員会の協力を得て、発掘調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

新浜は塩釜市新浜三丁目にある。塩釜市の中心部から北東約３ ｋｍの地点で、新浜の水産加工団地の東側の塩釜湾に面した浜辺と言ったほうがわかりやすい。

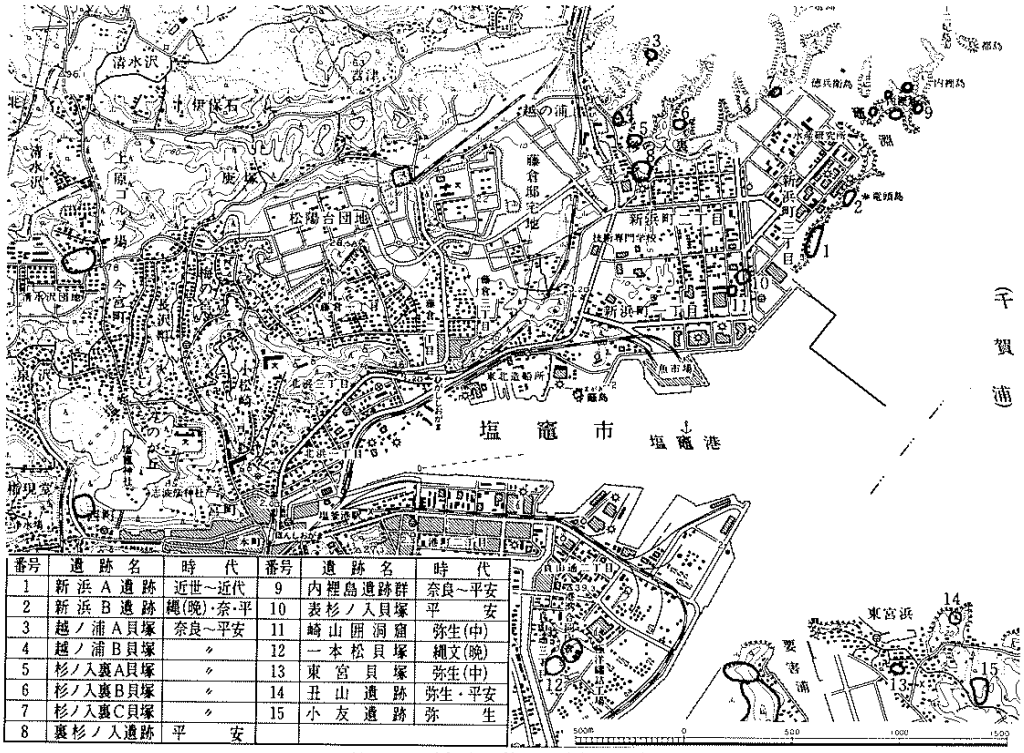
遺跡の発見の端緒は、前述したように昭和 57 年の文化財保護地区指導員である高橋守克氏の文化財定期パトロールによる。高橋氏の報告によると「市内杉ノ入半島の塩釜湾に面した海浜で、通称崎山浜と呼ばれる地で、現場には焼けた貝殻の貝層が認められ、浜汀の海蝕された断面に焼けた石組遺構が存在する。また、奈良・平安時代頃と推定される製塩土器が散布している。おそらく、古代の製塩に関する遺跡であろう」とある。また、永沢譲治氏が昭和５年に崎山遺跡を調査したときの報告に「（崎山遺跡）を北東に去数丁のところ、同じく島を囲む入江の岩壁中部に一の横穴あり、その間口七十ｃｍ、縦横二米突、高さ一米突の大きさを有し、其の内部を検したるに遺物は一も見當らなかった」という部分がある(文献①、８頁)。この横穴の地点は挿入地図をみると新浜Ｂ遺跡に相当するが、調査の時点では発見することができなかった。Ａ遺跡には海蝕の洞穴（整形して貝灰生産の窯に利用）があるが、規模が合わない。したがって永沢氏報告の横穴については不明である。なお、永沢氏は新浜遺跡の貝層の分布などには触れていないので、遺跡の存在に気がつかなかったようである。

古い地図をみると、新浜付近の旧地形は、出入りの激しい細長い２本の半島が北東方向に突き出ており、東が表杉ノ入半島、西が長崎半島とよばれた。この両半島にはさまれて表杉ノ入湾があったが、昭和 20 年代から 40 年代にかけて付近の丘陵を削って埋め立てられ、今は魚市場や

大型水産団地ができるなど、旧地形や環境はすっかり変わってしまった。遺跡は付近に限っても、新浜遺跡をはじめ、表杉ノ入貝塚（文献②）・崎山遺跡(文献②、③)・越ノ浦A貝塚・越ノ浦B貝塚・杉ノ入裏A貝塚・杉ノ入裏B貝塚・杉ノ入裏C貝塚・裏杉ノ入遺跡・内裡島遺跡群（５地点）などがある。この多くが出入りの激しい半島や島嶼の内彎した小さな浜辺に立地するもので、貝塚を伴い、製塩土器の細片が多数散布するのが常であり、古代の製塩作業に関係する遺跡（製塩遺跡）とみられる。こうした小さな浜辺に立地する製塩遺跡はごく最近になって注目されるようになったもので、すでに表杉ノ入湾の埋め立てや塩釜港の整備で破壊されてしまったものも多数あったのではないかと考えられる。なお、こうした遺跡の分布は松島湾全体に及び、湾内でこれまでに確認された製塩遺跡は100をこえる数であり、全国的にみても注目すべき在り方を示している。また、塩釜神社の起原に関わりをもつ重要な遺跡群といってよい。

新浜遺跡の地形について述べよう。新浜遺跡は二ケ所の地点からなる。南をA遺跡、北をB遺跡とよび、約120m離れている。

A遺跡は浜汀の長さ70m、奥行き10m、面積約650㎡の細長い小さな浜辺で、奥から浜汀にむかって緩やかに傾斜する。背後は高さ約15mの切り立った凝灰岩の崖となる。遺構の発見され



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	新浜A遺跡	近世～近代	9	内裡島遺跡群	奈良～平安
2	新浜B遺跡	縄(晩)・奈・平	10	表杉ノ入貝塚	平安
3	越ノ浦A貝塚	奈良～平安	11	崎山囲洞窟	弥生(中)
4	越ノ浦B貝塚	〃	12	一本松貝塚	縄文(晩)
5	杉ノ入裏A貝塚	〃	13	東宮貝塚	弥生(中)
6	杉ノ入裏B貝塚	〃	14	丑山遺跡	弥生・平安
7	杉ノ入裏C貝塚	〃	15	小友遺跡	弥生
8	裏杉ノ入遺跡	平安			

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

た部分の標高は２～３mである。発掘前に焼けた凝灰岩の切石が汀近くに露出していた。汀に製塩土器は殆ど散布していなかった。

Ｂ遺跡は浜汀の長さ 60m、奥行き 20m、面積約 400 ㎡の細長い小さな浜辺で、奥から浜汀に向かってかなりの傾斜がある。背後は高さ約 15mの切り立った凝灰岩の崖となる。遺構の発見された部分の標高は３～４ｍである。発掘直前に草刈りを行うと、汀近くの断面に貝層があらわれた。汀には少量の製塩土器の破片が散布していた。

両地点とも浜辺への出入りは半島の尾根を通じるよりは船を使ったほうがはるかに便利であったと思われる。また、高潮や波の荒い時は、海水が遺構面を覆うのみならず、背後の岩壁に直接達したことであろう。したがって、恒常的な生活が営まれたとは考えることが出来ず、塩生産を行ったり、(調査で初めて分かったことであるが)貝灰を生産したりする季節的な作業場であったとみられる。

Ⅲ　新浜Ａ遺跡の調査内容

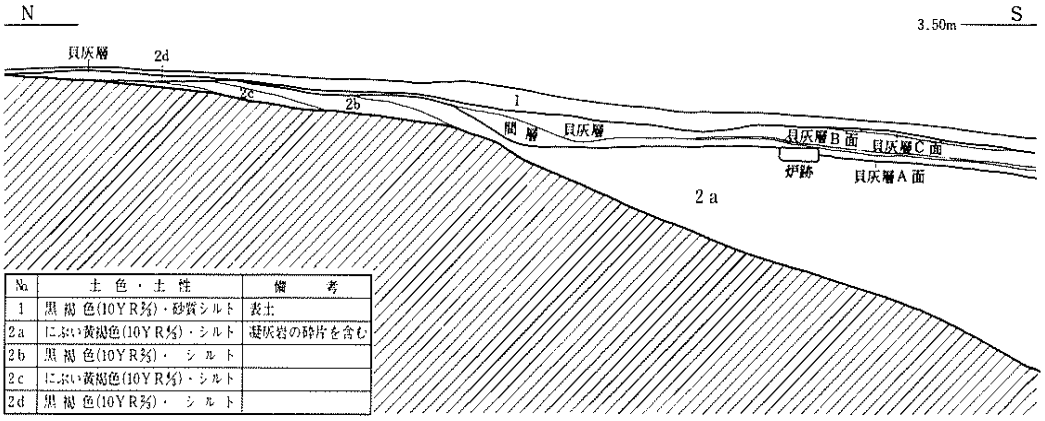
１．基本層位

調査区の基本的な層位は土性や色調から以下のように分かれる。

第１層：表土である。黒褐色の砂質シルトで、厚さは約 15 cmである。

第２層：凝灰岩の砕片を含むにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルトの互層で、厚さは南（海）側で次第に厚くなっており、最も厚い部分で約 1.5mある。この層の上面で第１～３号窯跡や貝灰層を検出した。

第３層：凝灰岩の岩盤で地山である。南へかなり傾斜している。この上面で第 １・２焼面を検出した。



No	土色・土性	備考
1	黒褐色(10YR2/3)・砂質シルト	表土
2a	にぶい黄褐色(10YR4/3)・シルト	凝灰岩の砕片を含む
2b	黒褐色(10YR2/3)・シルト	
2c	にぶい黄褐色(10YR4/3)・シルト	
2d	黒褐色(10YR2/3)・シルト	

第２図　基本層位

２．遺構とその出土遺物

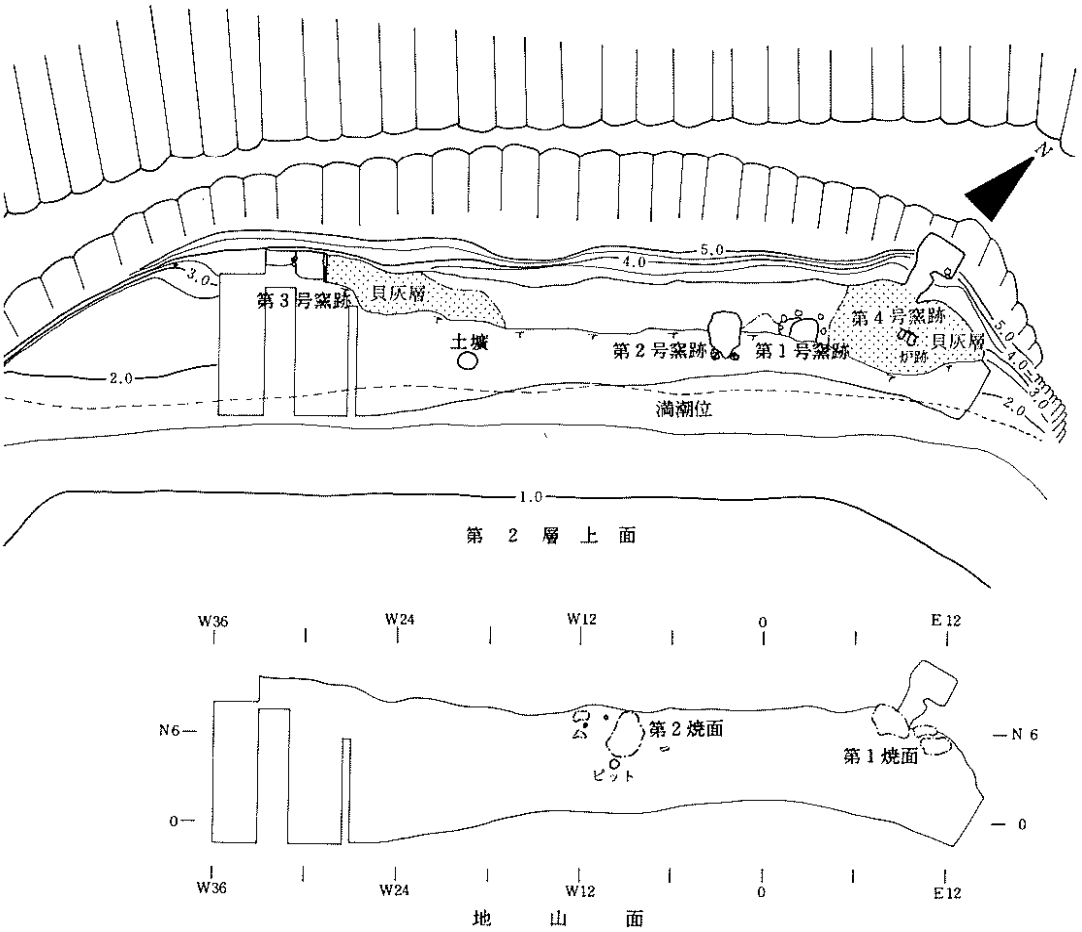
新浜A遺跡で発見された遺構は、第２層上面で窯跡３基・炉跡１基・土壙１基、凝灰岩の地山面で焼面２ケ所・ピット１基がある。以下、検出面ごとに記述する。

A．第2層上面検出の遺構

１．第1号窯跡（第４図）

第２号窯跡の東約３ｍのところにあり、これと平行している。床面のみ検出されたもので、床面は三枚あり、同じ場所で２回作り替えられている。床面は古い順に1a･1b･1c面とする。出土品はない。

1a面は東西 1.3m､南北 1.4mの範囲に残存するが､1c面の床面の掘り方と切石据え穴に切られている部分がある。構築方法をみると､深さ 0.2mの浅い皿状の掘り方に多量のカキ殻の砕片（貝灰）を含む土で床を貼り、その上面を床面としている。この床面上にしまりのない極暗褐色土が堆積していた。



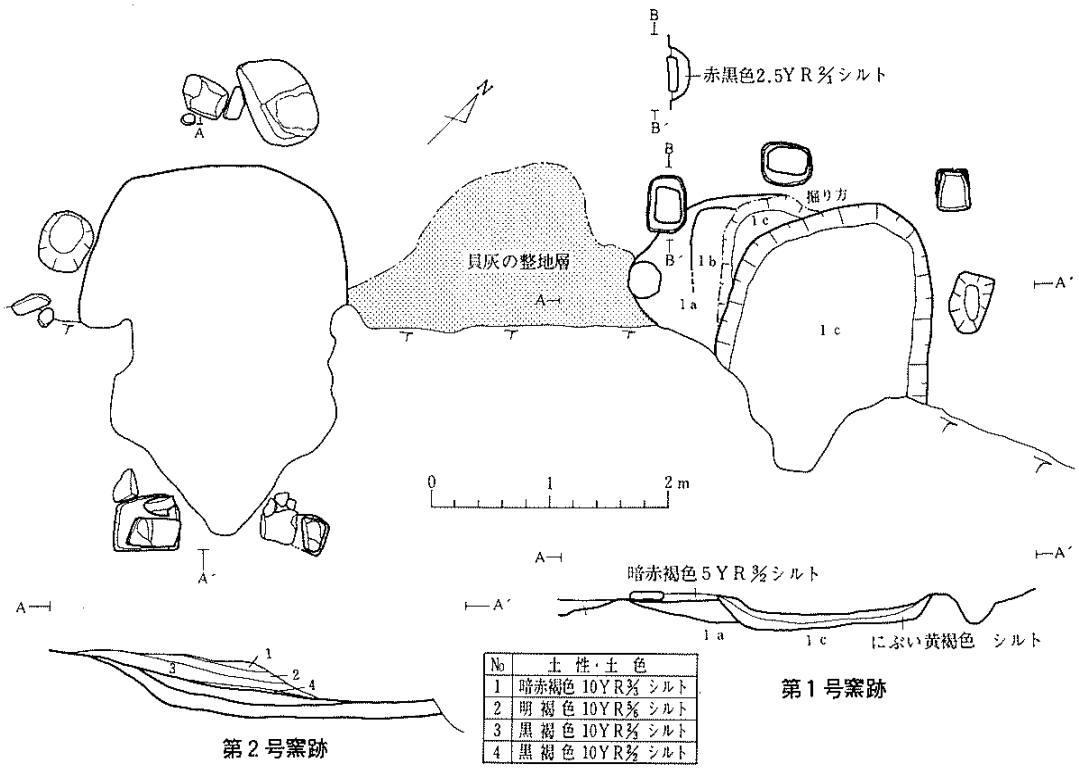
第３図 遺 構 位 置 図

1b面は間層が存在する部分以外では1a面に融着しており、平面形や規模などよくわからない。構築方法をみると、1a面の一部と間層の上に貝灰を多量に含む土で床を貼り、その上面を床面としている。

1c面は東西約1.8m、南北約1.7m以上の不整の方形で、南へ若干傾斜しており、横断面は中央が窪み、浅い皿状を呈する。構築方法をみると、床面と同大の方形の浅い穴を掘り、貝灰を含むしまりのないにぶい黄褐色土で裏込めし、その上に多量の貝灰を含む土で床を貼り、その上面を床面にしている。床面の周囲には4個の切石とその抜き取り穴が1個あり、これらによって囲まれる範囲は東西2.4m、南北1.0m以上であり、上屋の柱などを支える土台石であると考えられる。この切石は火熱を受けて赤く変色しており、ボロボロに崩れやすくなっている。切石は40×30cmに厚さ20cmの直方体の凝灰岩製で、同形同大の据え穴に据えられていた。なお、据え穴は1a面を切っているが、1b面との重複関係はみられないので、1b面にも伴う可能性がある。

2．第2号窯跡（第4図）

第2号窯跡と第1号窯跡との間には大量の貝灰を含む厚さ10cmほどの整地層があり、第2号窯跡の床面と第1号窯跡の1a面はこの整地層の上に築かれていた。



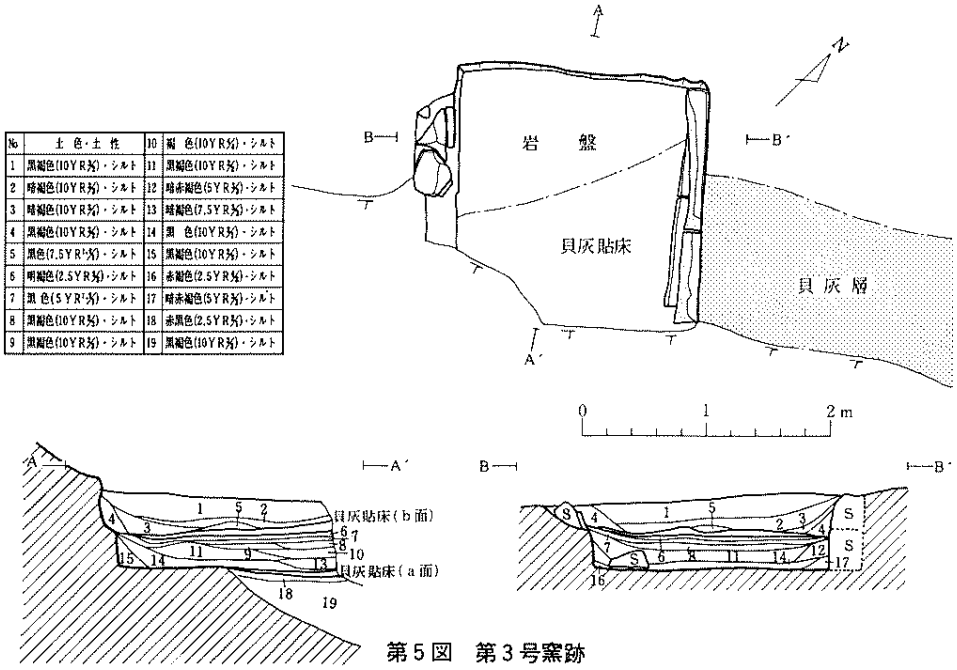
No	土性・土色
1	暗赤褐色 10YR3/1 シルト
2	明褐色 10YR5/6 シルト
3	黒褐色 10YR3/1 シルト
4	黒褐色 10YR3/2 シルト

第4図　第1・2号窯跡

床面は幅約2.0m、奥行約3.0mあり、側面がやや膨らむ長方形の平面で、南側に切石を据えた幅 0.7mの焚口がある。床面は南の焚口部に向かってやや傾斜し、横断面は浅い皿状を呈する。側壁の立ち上がりは不明である。焚口の切石は長さ40ｃm、幅30ｃm、厚さ20ｃmの直方体で、凝灰岩製である。西側の切石の据え方は一辺約 50ｃm四方の大きさであった。床面の構築方法をみると、浅い皿状の掘り方に貝灰をまじえた土で床を貼り、その上面を床面としていた。なお、断ち割り調査で厚さ５ｃmの間層を挟んでよく焼けた床面が２枚あることがわかったが、周辺部で融着しており区別することができず、ここでは一括して扱っている。窯跡の中央部に堆積した層は貝灰を若干含む暗褐色土で、磁器の飯茶碗と徳利の破片が出土している。徳利は肥前製品とみられ、呉須や釉薬からみて江戸時代後半のものと思われる。飯茶碗は東北地方で作られたものかもしれない。

３．第3号窯跡（第５図）

凝灰岩の切石積みの窯跡で南側おそらく焚口に近い部分が波に浸食されて失われている。大きさは内法で幅約 1.8m、奥行き 1.8m以上の方形である。床面は間層を挟んで２枚(ａ面、ｂ面)ある。出土品はない。構築方法をみると、四角に穴をほり、東西両側に凝灰岩の切石を２段以上積んで側壁とし、奥壁は岩盤を整形したままの面を利用している。残存する壁の高さは0.7mでよく焼けている。床面（ａ面）は、奥のほうは岩盤を整形した面をそのまま利用しているが、前の方は貝灰を含む土で貼床したもので、平坦である。壁に積まれた切石は２段残っており、大きさは東側のものが90 cm、幅20 cm、高さ 20～40 cm、西側のものが長さ 40 cm、幅 40 cm、高さ



No	土 色・土 性	10	褐 色(10YR⅔)・シルト
1	黒褐色(10YR⅔)・シルト	11	黒褐色(10YR⅔)・シルト
2	暗褐色(10YR⅓)・シルト	12	暗赤褐色(5YR⅓)・シルト
3	暗褐色(10YR⅓)・シルト	13	暗褐色(7.5YR⅓)・シルト
4	黒褐色(10YR⅔)・シルト	14	黒 色(10YR⅔)・シルト
5	黒色(7.5YR¹⁄₂⅔)・シルト	15	黒褐色(10YR⅔)・シルト
6	明褐色(2.5YR⅓)・シルト	16	赤褐色(2.5YR⅓)・シルト
7	黒 色(5YR¹⁄₂⅔)・シルト	17	暗赤褐色(5YR⅓)・シルト
8	黒褐色(10YR⅔)・シルト	18	赤黒色(2.5YR⅓)・シルト
9	黒褐色(10YR⅔)・シルト	19	黒褐色(10YR⅔)・シルト

第５図　第３号窯跡

30ｃｍあり、いずれも直方体である。床面の上には貝灰を含む黒褐色や暗褐色の土層が 40ｃｍほど堆積し、上の床面（ｂ面）との間層となっている。上の床面（ｂ面）は間層の上面に貝灰を大量に含む土で貼り床したもので、壁はもとのものをそのまま利用している。残存する壁の高さは約 30ｃｍある。床面の上には貝灰を含む黒褐色や暗褐色の土層が 30ｃｍほど堆積していた。

なお、この窯跡は焚口部があったと想定される南側が欠損しており、上部の構造も不明である。全体像を推定することが出来ない。

４．第３号窯跡に伴う貝灰層

第３号窯跡の東側に東西 11.6m、南北 3.0m以上の範囲に厚さ約 10mの貝灰層が分布している。この層は主として焼かれたカキ殻で、原形を留めるもの、砕片になったもの、粉末状になって固まったものなどがブロック状に入りまじり、黒色に変色しているものもあった。また、炭化物もふくまれていた。第３号窯跡に近い部分の貝灰層の上面は固くしまっており、作業面として踏み固められた結果かもしれない。この貝灰層は第３号窯跡に伴うものであろう。

５．土　壙

上記の貝灰層分布地域の南にある円形の土壙である。第２層を除去した地山面で検出されたが、内部に多量の貝灰がはいっていることから、掘り込み面は第２層上面と考えられる。大きさは径約 1.0m、確認面からの深さ約 0.9mで、壁はやや内傾している。場所からみて井戸とは考えにくいので、用途は不明である。

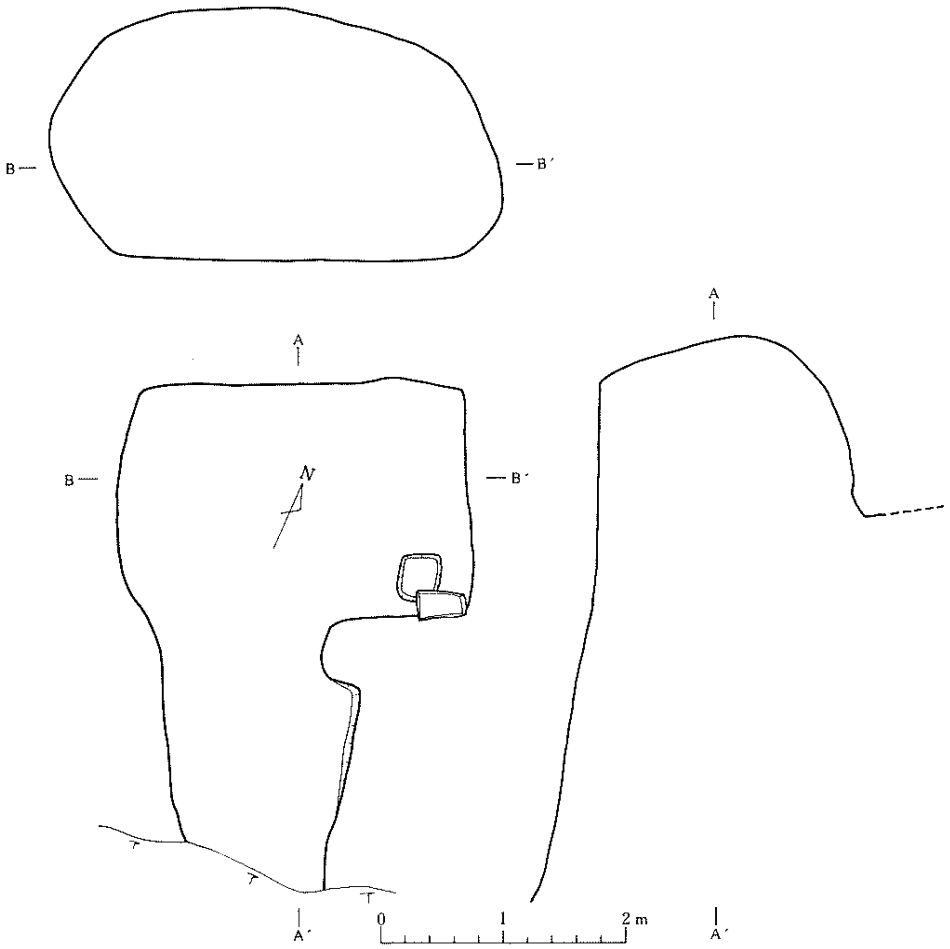
６．第４号窯跡（第６図）

海蝕による自然の洞窟を整形して窯として利用したもので、床に近い部分を除いて剥落がみられる。大きさは幅約 2.8m、奥行き約 2.0m、高さ約 2.1mである。床面は平坦に整形した岩盤の面をそのまま利用し、平面形は長方形である。床面の東南隅に長径 40×短径 30ｃｍ、深さ 10ｃｍの方形のピットがあり、その上に焼けた凝灰岩の切石がのっていた。床面や壁の剥落していない部分は焼けて赤く変色していた。また床面上に薄く堆積層があるが、ほとんど後世の攪乱を受けていた。しかし、壁よりの部分に炭他物を含む貝灰がわずかに残っているところがあった。

洞窟の開口部分は床面に近い部分では幅約 1.4mにせばまり、西側に寄っている。この開口部から外側にかけて、南に傾斜する幅約 1.5mの平坦面が作り出されており、その面が焼けていることから焚口部と考えられた。

７．第４号窯跡に伴う貝灰層

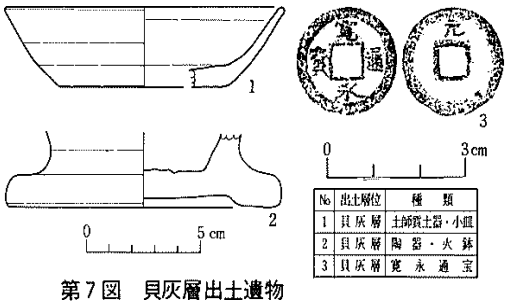
第４号窯跡の前面に東西約 1.0m、南北約 6.5mの範囲に厚さ 20ｃｍの貝灰が分布しているが、南側は波のため浸食されている。この貝灰には間層を挟み 3 枚の固く締まった面がある。古い順にａ面・ｂ面・ｃ面とする。ａ面には後に述べる石組炉が作られていた。ａ面とｂ面の間には凝灰岩の破片を含む黒褐色土が挟まれていた。ｂ面とｃ面の間にはやや大きめの破片からなる



第６図　第４号窯跡

貝灰層が挟まれるが、北側の部分では間層がなくなり、ｂ面とｃ面は同一の面となってしまう。この貝灰層は第４号窯跡に伴うものと考えられるので、ａ面の石組炉も第４号窯が使用されていた期間につくられ利用されたものと考えられる。

出土品（第７図、図版３）として、貝灰層の間層や貝灰層から陶磁器（６点）・煙管の吸口（１点）・寛永通宝（１点）などが発見された。陶磁器には相馬大堀焼とみられる土瓶(陶器)、山形平清水焼とみられる山水？を描いた染付けの飯茶碗(磁器)、産地不明のコバルトを用いた染付けの飯茶碗の蓋(磁器)、軟質の



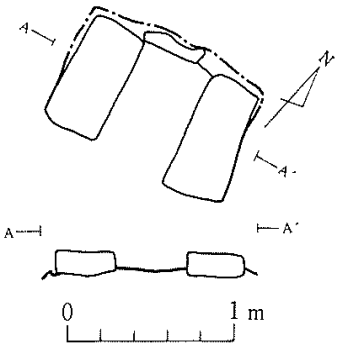
No	出土層位	種　類
1	貝灰層	土師質土器・小皿
2	貝灰層	陶　器・火　鉢
3	貝灰層	寛　永　通　宝

第７図　貝灰層出土遺物

火鉢（２)、かわらけ小皿（１）などの破片がある。土瓶や染付け磁器の年代は明治時代前半とみられる。したがって貝灰の形成や第４号窯の操業年代も同時期頃と考えられる。

８．石組炉跡（第８図）

第４号窯跡に伴う貝灰層のａ面に四角に穴を掘り、周囲に凝灰岩の切石を据えて構築した石組炉で、内法は幅約40ｃｍ、奥行約70ｃｍ、深さ約10ｃｍである。床は貝灰が混じる土で貼り床されたもので、床面・壁ともによく焼けていた。切石の大きさは側壁のものが長さ約 70ｃｍ、幅約30ｃｍ、高さ約15ｃｍで、奥壁のものが長さ約40ｃｍ、幅約10ｃｍ、高さ約5ｃｍである。この石組炉は前述したように第４号窯の操業時期に使用されたものである。



第８図　石 組 炉 跡

Ｂ．第３層（地山）上面検出の遺構

１．第１焼面（第３図）

崖際近くに位置する。東西約5.2m、南北約2.0mの範囲に近接してみられる　３ケ所の焼面を一連の作業でできたものと推定し、一括して同一の焼面としてとらえた。

２．第２焼面（第３図）

やはり、崖際近い部分に位置する。東西約6.3m、南北約3.1mの範囲に点在する焼面を一括してとらえたものである。

これらの焼面の上には遺物・炭化物・灰などがまったくない。おそらく、火熱を必要とする作業がおこなわれたのちに、高潮などのため焼面上にあった一切のものが海中にもっていかれたのであろう。焼面の上に堆積している第２層はまったくの自然堆積による層である。

３．ピット（第３図）

第２焼面の南側にある。径約50ｃｍ、深さ約30ｃｍ、底径15ｃｍの円形のピットである。性格は不明である。

３．包含層からの出土遺物（図版３）

自然堆積層（基本層位と同じ）からも極めて少量の遺物が出土しているが、細片のため所属時期は不明である。第１層から土師器と須恵器の甕の体部破片が出土した。第２層では土師器の小片、縄文が施された土器片、碧玉の石核などが出土している。

４．考　察

Ａ．遺構の性格と年代

新浜Ａ遺跡で発見された各種の遺構について性格と年代について考えてみたい。

１．第２層上面検出の遺構

第３号窯跡と第４号窯跡は、構造の上で大きな違いがあるようにみえるが、四周に壁があることで共通し、大きな特徴となっている。両窯跡ともに、そこから掻き出されたと推定される大量の貝灰を伴っており、カキ殻を焼いて貝灰を生産した窯跡であることは明白である。また、貝灰に含まれるカキ殻も原形を残すもの、砕片となっているもの、粉末となり固い塊となっているものなどが混在することから貝灰の不良品を投棄した場と考えられる。またこの貝灰は厚さ0.2mほどの薄さで比較的広く分布し、しかも部分的に固く締まった面があることから、貝灰焼成に伴う種々の作業面として利用されたこともあったようである。第４窯跡に伴う貝灰のａ面に作られた石組炉は他の窯跡と比べ著しく小型であり、貝灰焼成に従事した人々が炊事などに利用したものであろう。

第１・２号窯跡は、同一の整地面に構築されていること、海側に寄って並んで位置すること、平面形や規模が類似することなどから、同時期に同じ目的でつくられた窯跡とみられる。

両窯跡は、第３・４号窯跡と異なって、四周に顕著な壁がみられない。また、周囲にここから掻き出したと思われる貝灰の層も分布しない。したがって、貝灰を生産した窯跡と断定することは出来ない。もう一つ、立地条件からみて考えられるのは鉄釜を使用した製塩炉跡(竈跡) である。しかし、窯の上部構造が全く不明であり、製塩炉とするにも確証がない。石巻市渡波の万石浦に面した大浜遺跡は、石巻市教育委員会の調査で、江戸時代の製塩場跡と考えられている（文献④）が、ここの「燃焼炉状遺構」の床面は浅く皿状に窪み、貝灰を含む土で貼り床されており、本遺跡の第１・２号窯跡と類似する点が多い。

表１　新浜遺跡の遺構の性格・年代の表

	遺構名	平面形	幅×奥行(m)	焚口	壁	性格	付属施設	年代
地山面	第１焼面	長楕円形	5.2×2.0	不明	不明	製塩遺構？	なし	古代以前
	第２焼面	楕円形	6.3×3.1	不明	不明			
	ピット	円形	径0.5	―	有	不明	なし	
第２層上面	第１号窯跡	側辺がやや膨らむ長方形	1.8×(2.4)	南？	(有)	貝灰あるいは塩を生産した窯跡	なし	江戸時代
	第２号窯跡		2.0×3.0	南	(有)		土屋用柱の土台石	
	第３号窯跡	長方形	1.8×(1.8)	南？	顕著	貝灰を生産した窯跡	不良品の捨て場(貝灰層)とたたき面(作業面)	明治時代
	第４号窯跡	長方形	2.8×2.0	南	顕著			
	土壙	円形	径1.0	―	有	鹹水溜？		
	石組炉	方形	0.4×0.7	―	有	炊事用	第３号窯跡に伴う	

したがって、第１・２号窯跡は貝灰生産あるいは塩生産のいずれかに使用された窯跡と考えられるが、断定することは出来なかった。

第３号窯跡にともなう貝灰層が分布する地域の南にある円形の土壙は真水を得るための井戸とは立地的に考えられない。浜辺で海水を汲むより、この穴に海水を溜めて汲み上げたほうが便利と考えて、利用したのであろうか。あるいは小規模の製塩作業でも行われた時の鹹水溜であろうか。性格不明である。

２．第３層（地山）上面検出の遺構

第１焼面と第２焼面はどちらも崖際近くにあり、地山面で検出されたこと、範囲が比較的広範囲に及ぶことなどで共通する。しかし、直接火熱をうけた面ー地山面の上に薄く堆積していたと考えられる層の上面ーは残存しておらず、本来の形状や規模は不明である。また、遺物も伴っていない。

狭い浜辺に立地することを考えれば、この遺構も海に関連し、しかも大量の火熱を必要とした生産活動の場であったとみてよいであろう。松島湾に分布する遺跡の在り方からみれば、最も可能性のあるのは製塩作業であろう。年代はこの遺構を覆う第２層に中世以降の遺物が含まれていないことから古代以前と考えたい。なお、第２焼面の南側にあるピットの性格は不明である。

Ｂ．仙台湾の貝灰生産について

最後にカキ殻を焼いて貝灰を生産したことについて触れてみたい。

仙台湾でいつごろから貝灰を生産していたか明らかではない。『塩釜町留書』（文献⑤､143頁）に「崎山にてかき灰焼と所の者の迷惑」と題して、「崎山ニ而かき灰焼方渡部屋権左エ門ト申者願申上御受ニ而やきかた申候處所之痛ニ相成候(以下、省略)」とあり、本遺跡の所在する崎山付近で、江戸時代に藩の許可を得て、貝灰を生産していた者がいたことがわかる。当時、ここは「馬足不相叶」という不便なところであったようである。もし、新浜A遺跡の第１・２号窯跡が貝灰を生産したものであるなら､同一のものかもしれないが断定は出来ない。その他、『風土記書出』など地誌類を捜したが、江戸時代の貝灰生産に関する記事をみつけることが出来なかった。

『仙台領鉱物調』（文献⑥.247 頁）をみると､次のような記載があり、明治初年に東宮浜(現、七ケ浜町) で「カキ灰」を生産していたことがわかる。

東宮浜

一かき灰　　請負人　草賀　與蔵

請合人　佐藤勘十郎

庄屋　星　源八

此運上金弐歩也

明治三午年より申の年迄末三ケ年御下知済み

また、新浜遺跡の調査のとき作業員として協力を頂いた浅岡惟男氏（大正７年生まれ）は、野々島出身でこどもの頃の記憶として、浜辺にこわれた窯跡があり、「カキ殻を焼いた窯で、津波のときにこわれた」と聞かされたという。これも明治時代の例であろう。

以上のことから、仙台湾に於いては江戸時代から明治時代にかけてカキ灰の生産が幾つかの場所で行われており、新浜A遺跡もその一つであったことがわかる。貝灰生産の遺構が発掘調査されたのは新浜A遺跡が最初であるが、湾内にはまだまだ同様の遺構が存在するのであろう。貝灰生産がこの地域でどの時代まで遡るかはこれからの課題であろう。

カキ灰生産の目的はよくわからない。琵琶湖沿岸では畑の肥料にするために蜆を焼いて貝灰を作ったという(文献⑦)。また、三和土や壁の強化剤として使用したことも考えられる。一般的かどうかはわからないが、気仙郡地方の貝灰は白粉（おしろい）の原料にしたという（文献⑧)。『流留・渡波塩田開田誌』(色川善作手記、文献⑨所収）には、渡波塩田では「大坪は都て粘土にて支那式にて焼いた。牡蠣灰を交ゆ」とか「台坪は……粘土に牡蠣灰を交え厚さ上部二寸、下部四寸の櫛形に塗りあげ……」とあり、大坪（鹹水溜）や台坪（鹹汁採取の施設）をつくるとき粘土にカキ灰を混ぜて利用していることがわかる。また、石巻市大浜遺跡の調査では江戸時代の素水製塩作業に伴う燃焼炉状遺構や水槽状遺構の底面にカキ灰を混ぜた粘土が使用されているという(文献④)。他の地方でも、塩田の煎熬用竈をつくる時にカキ灰を混ぜているようである(文献⑩)。したがって、カキ灰生産の目的のうち、もっとも可能性の高いのは、松島沿岸でおこなわれた揚浜式塩田や小規模の素水製塩作業場に供給するためではなかろうか。

Ⅳ　新浜Ｂ遺跡の調査内容

１．基本層位

調査区内の基本的な層序は場所によって若干の違いが見られるが、第９図に代表させることができる。

第１層　暗褐色の砂層で、表土である。調査区のほぼ全面に広がっており、厚さ約 20ｃｍである。

第２層　黒色シルト層で、厚さ約 15～40ｃｍである。

第３層　暗褐色シルト層で、厚さは約 40ｃｍである。第１・２号竪穴住居跡はこの層の上面から掘り込まれている。

第４層　黒色のシルト層で、粘性がある。カキ・アサリなどを含む混土貝層で、厚さ約 10ｃｍである。

第５層　暗褐色シルト層で、少量の貝殻や凝灰岩（径２～５ｃｍ）を含む。厚さは約 10ｃｍである。

第６層　カキ・アサリの純貝層で、厚さは約 20ｃｍである。

第７層　暗褐色のシルト層で、厚さは約 40ｃｍである。第３号竪穴住居跡、第１・２号炉跡はこの層の上面で検出された。

第８層　カキ・アサリの純貝層で、厚さは約 20ｃｍである。調査区の中央に比較的広く分布する。

第９層　黒褐色のシルト層で、厚さは約 10ｃｍである。

第10層　暗褐色のシルト層で、厚さは約 15ｃｍである。

第11層　黒褐色のシルト層で、凝灰岩砕片（径約５ｃｍ）を数多く含む。厚さは 10～30ｃｍである。

第12層　黒褐色の砂質シルト層で、第11層よりも幾分明るい色調である。凝灰岩の砕片（径約５ｃｍ）を多く含む。厚さ約 15～40ｃｍである。

第13層　黒色シルト層で、木炭を含む。厚さは 15～40ｃｍである。

第14層　暗褐色シルト層で、厚さは 5～40ｃｍである。

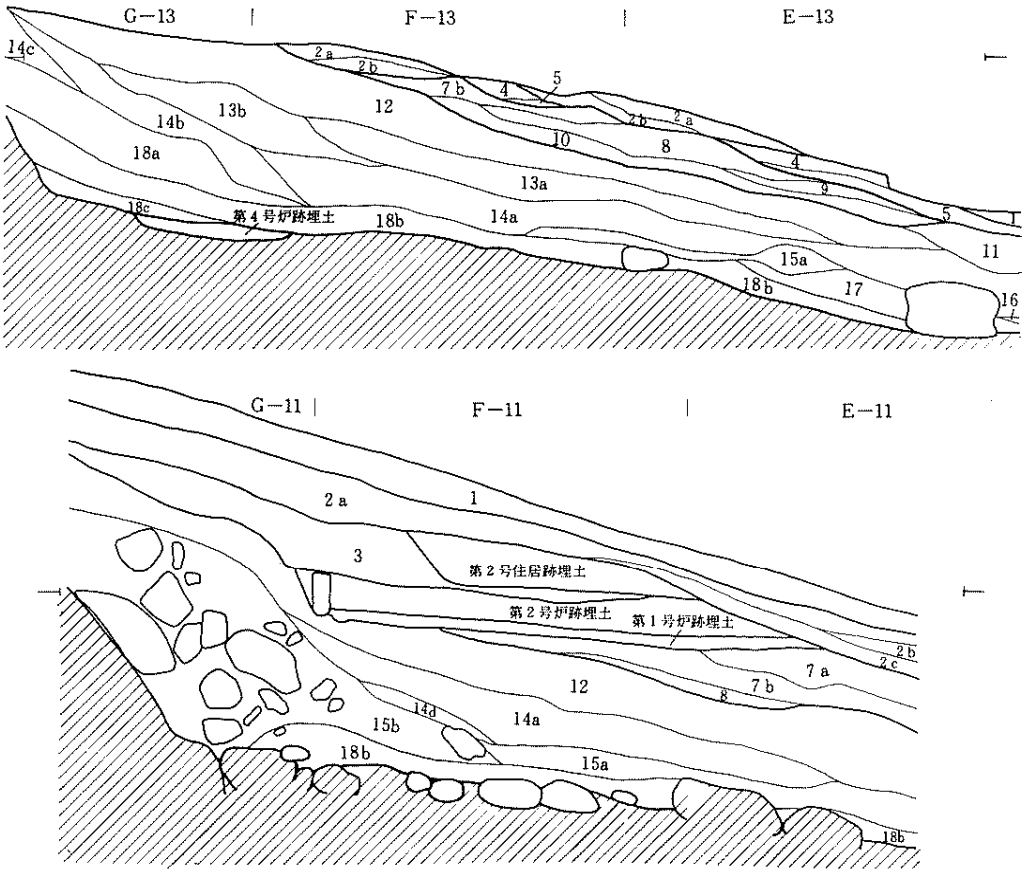
第15層　黒褐色の砂質シルト層で、凝灰岩の大きめの砕片を大量に含む。厚さは 5～20ｃｍである。

第16層　灰黄褐色の砂層で、凝灰岩の砕片（径２～４ｃｍ）を数多く含む。厚さは約 40ｃｍである。

第17層　黒褐色の砂質シルト層で、厚さは 10～20ｃｍである。

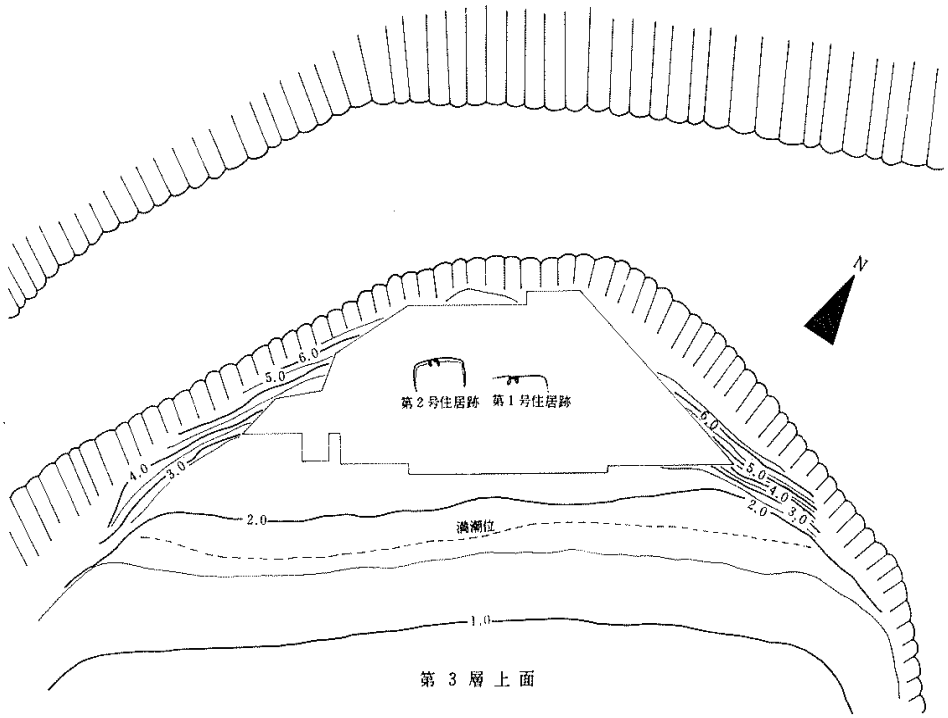
第18層　黒褐色の砂質シルト層で、厚さは10～80ｃｍである。

第19層　凝灰岩の基盤及びその崩壊土で、いわゆる地山である。第３・４号窯跡はこの層の上面に構築されている。

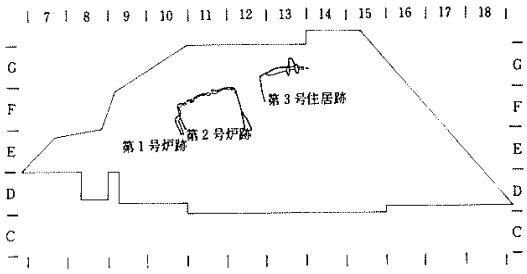


層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
1	暗褐色（10YR3/3）・砂	表土	12	黒褐色（10YR3/2）・シルト	凝灰岩砕片（径５cm前後）を多量に含む
2a	黒　色（10YR1.7/1）・シルト		13a	黒　色（10YR2/1）・シルト	木炭片を含む
2b	暗褐色（10YR3/4）・砂質シルト		13b	暗褐色（10YR3/3）・シルト	
2c	黒褐色（7.5YR3/2）・シルト		14a	暗褐色（10YR3/3）・シルト	
3	暗褐色（10YR3/3）・シルト		14b	暗褐色（10YR3/3）・シルト	
4	黒　色（10YR1.7/1）・シルト	カキ、アサリ等の混土貝層	14c	暗褐色（10YR3/4）・シルト	
5	暗褐色（7.5YR3/4）・シルト	凝灰岩砕片（径２cm～５cm）を含む	14d	極暗褐色（7.5YR2/3）・砂質シルト	
6		カキ、アサリ等の貝層	15a	黒褐色（10YR2/3）・砂質シルト	
7a	暗褐色（10YR3/3）・シルト		15b	暗褐色（10YR3/3）・シルト	大きな凝灰岩片を多量に含む
7b	暗褐色（10YR3/4）・シルト		16	灰黄褐色（10YR4/2）・砂	凝灰岩砕片（径２cm～３cm）を含む
8		カキ、アサリ等の貝層	17	黒褐色（10YR2/3）・砂質シルト	砂質度が強い
9	黒褐色（10YR2/3）・シルト	木炭片を含む	18a	黒褐色（10YR2/3）・シルト	
10	暗褐色（10YR3/3）・シルト		18b	黒　色（10YR1.7/1）・砂質シルト	砂質度が強い
11	黒褐色（10YR2/3）・シルト	凝灰岩砕片（径５cm前後）を多量に含む	18c	黒褐色（7.5YR2/3）・シルト	焼土粒を含む

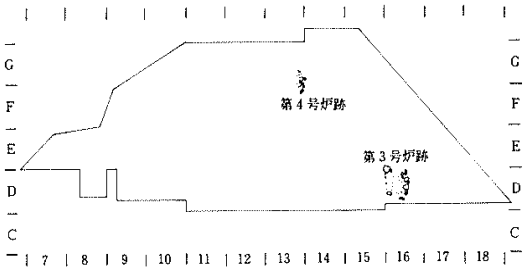
第９図　基本層位（上：13ライン　下：11ライン）



第 3 層 上 面



第 7 層 上 面



地 山 面

第10図 遺構位置図

２．遺構とその出土遺物

第１号竪穴住居跡（第10図）

(平面形･規模) 第２層上面で確認された。北半分が残存し、南半分は斜面のため流失している。また、西壁が検出されていない。このため、規模・平面形は不明であるが、残存長は東西3.8m、南北1.0mで、平面形は北東隅から隅丸方形と推定される。

(壁・床面) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存の良い部分で約40ｃｍある。床面は平坦で固く締まっている。

(カマド)北壁に設置されている。カマドの袖部は凝灰岩を芯とし、粘土を積み上げて構築されている。

(堆積土) 北壁に沿った狭い範囲で黒褐色シルトなどの堆積層が確認されている。

(出土遺物) 堆積土より土師器･須恵器･製塩土器が出土しているが、いずれも小片で図示できるものはない。土師器は坏・甕があり、整形の際にロクロ調整されたものが多い。須恵器は甕の体部破片である。製塩土器は器壁の厚いもので、後に述べる製塩土器Ｉ類に属する。

(年代) 堆積土出土の土師器は小片であるが、平安時代の表杉ノ入式とみられる。

第２号竪穴住居跡（第12図）

(平面形･規模) 第２層上面で確認された。北半分が残存している。平面形は隅丸方形と推定される。規模は東西約2.9m､南北2.3m以上である。

(壁・床面) 壁の立ち上がりはゆるやかで、高さは保存の良い部分で約50ｃｍある。床面は平坦で締まっている。

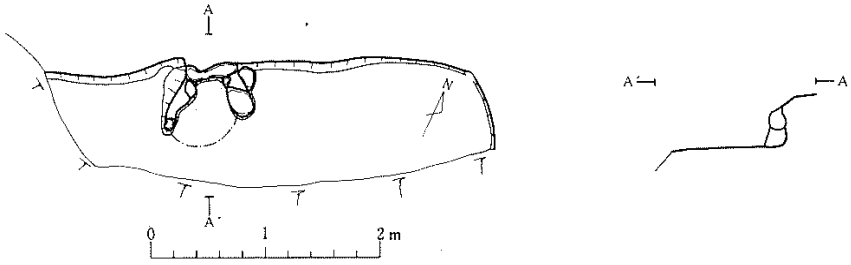
(カマド)北壁中央に設置されている。カマドの袖部は凝灰岩を芯として粘土を積み上げて構築されている。カマドおよびその底面は火熱を受け、赤褐色に変色している。

(その他の施設) 煙道・周溝・柱穴などは発見されなかった。

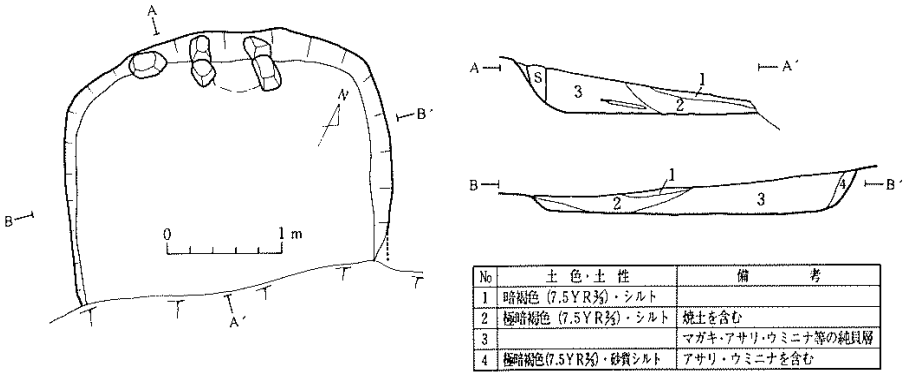
(堆積土) ４層に分けられる。第１層は暗褐色シルト層、第２層は焼土を含む極暗褐色シルト層、第３層はカキ・アサリ・ウミニナの純貝層、第４層はアサリ・ウミニナを含む暗褐色砂質シルト層である。

(出土遺物) 床面より土師器の坏･甕（１）･製塩土器（4.5）が出土している。坏はすべて内黒でロクロ調整されている。甕はロクロ調整された小型のものとナデ調整された体部破片である。製塩土器は後述する製塩土器Ｉ類に属するものである。

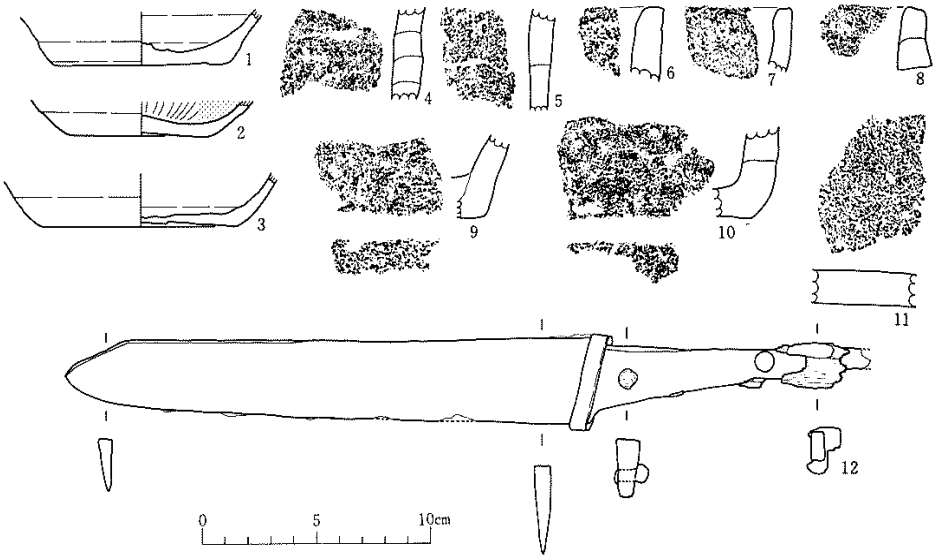
堆積土からはロクロ調整された土師器の坏（２）･甕、須恵器の坏（３）･甕、製塩土器（６～11)、鉄刀(12)が出土した。製塩土器は比較的多く出土したが、すべて製塩土器Ｉ類である。鉄刀は平造りで､両区である。切っ先は棟側から作り出されており、身と茎の境に柄縁が残る。柄は木質部がのこり、目釘で二ケ所とめられている。



第11図　第１号竪穴住居跡



No	土色・土性	備考
1	暗褐色（7.5YR3/3）・シルト	
2	極暗褐色（7.5YR2/3）・シルト	焼土を含む
3		マガキ・アサリ・ウミニナ等の純貝層
4	極暗褐色(7.5YR2/3)・砂質シルト	アサリ・ウミニナを含む



No.	出土層位	器種	特徴	No.	出土層位	器種	特徴
1	床面	土師器甕	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ロクロナデ	7	第３層	製塩土器Ⅰ類	外面：ナデ　内面：ナデ
2	第２層	土師器坏	外面：ロクロナデ、底部回転糸切り　内面：ヘラミガキ、黒色処理	8	第３層	製塩土器Ⅰ類	外面：ナデ　内面：ナデ
3	〃	須恵器坏	外面：ロクロナデ、底部回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	9	第３層	製塩土器Ⅰ類	外面：底部ナデ　内面：ナデ
4	床面	製塩土器Ⅰ類	外面：ナデ　内面：ナデ	10	第３層	製塩土器Ⅰ類	外面：底部ナデ　内面：ナデ
5	〃	製塩土器Ⅰ類	外面：ナデ　内面：ナデ	11	第３層	製塩土器Ⅰ類	外面：底部ナデ　内面：ナデ
6	第３層	製塩土器Ⅰ類	外面：ナデ　内面：ナデ	12	第３層	刀	鉄製、平造、平棟、両区、柄縁　・目釘・柄の木質部残る

第12図　第２号竪穴住居跡・出土遺物

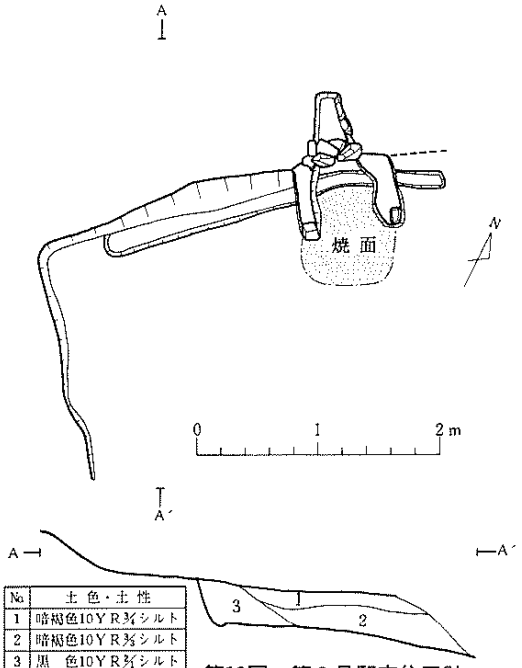
(年代) 堆積土出土の土師器は小片であるが、平安時代の表杉ノ入式とみられる。

第３号竪穴住居跡（第13・14図）

(平面形・規模)第７層上面で確認された。北半分しか残存しないが、東壁が検出されていない。平面形は残存する北西隅から方形と推定される。残存長は東西 3.5m、南北 2.2mである。

(壁・床面) 壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは保存の良い部分で35ｃmである。床面は平坦で、若干南へ傾斜している。

(カマド)北壁にカマドがあり、壁の外に煙道がのびている。カマドは粘土で作られているが、袖部の前端に凝灰岩を据えている。底面は火熱のため変色している。煙道は約60ｃmあり、側壁に凝灰岩を並べている。また、カマドとの接続部分では凝灰岩を天井としている。



No	土 色・土 性
1	暗褐色10ＹＲ3/4シルト
2	暗褐色10ＹＲ3/3シルト
3	黒　色10ＹＲ2/1シルト

第13図　第３号竪穴住居跡

(周溝) 北壁に沿って存在し、西壁にはみられない。幅10ｃmで、深さ３ｃmである。この周溝の上にカマドが構築されている。

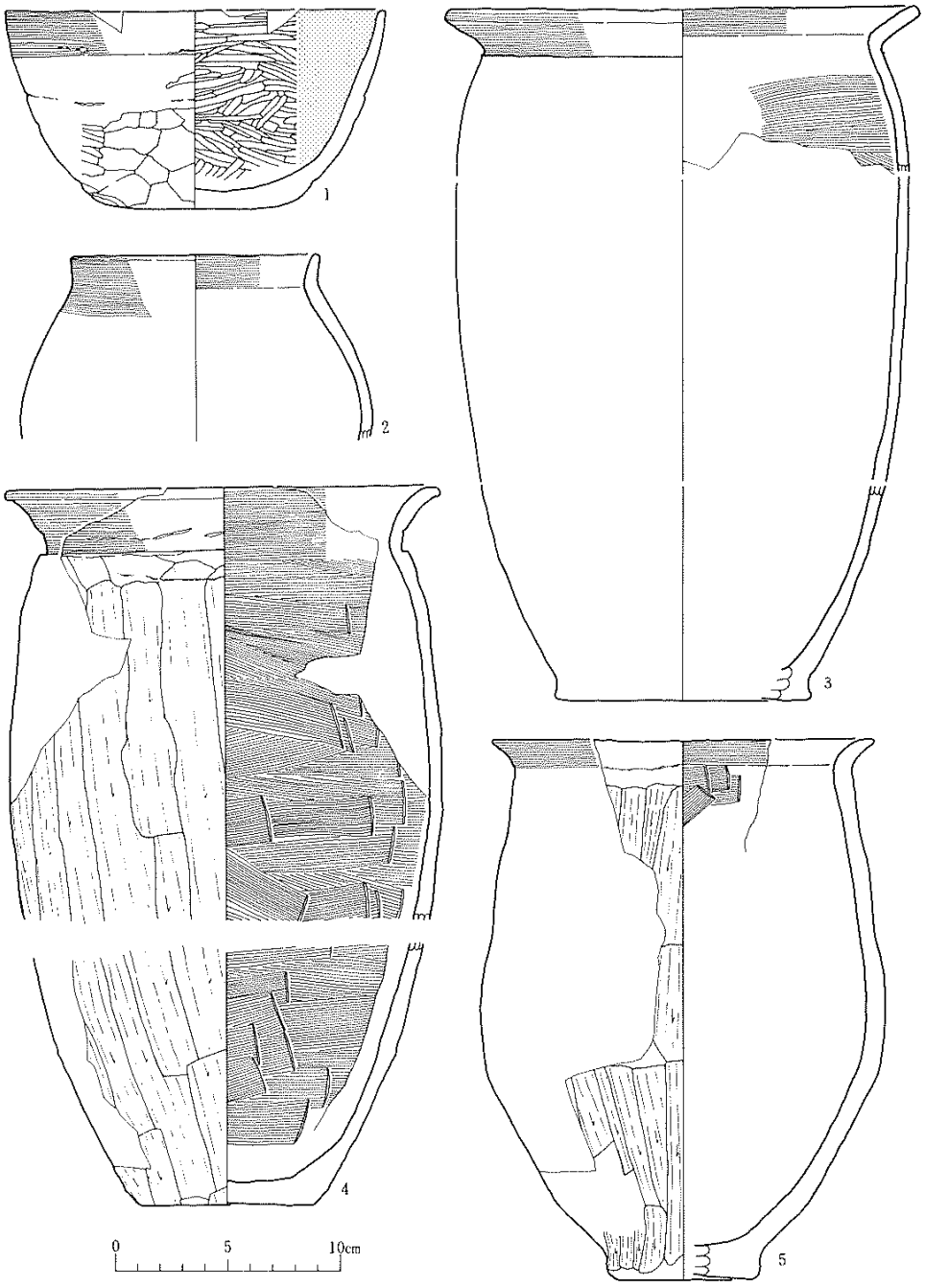
(その他の施設) 検出されていない。

(堆積土) 住居跡内の堆積土は３層に分かれる。第１層は暗褐色シルト層で、凝灰岩砕片(径約１ｃm)を含む。第２層は粘性のある暗褐色シルト層で、第３層は黒色シルト層である。

(出土遺物) 床面から土師器の甕（２～５)、須恵器の甕が出土している。土師器の甕には口縁部が直立し、体部が膨らむもの(２)と、口縁部が外反し、体部が僅かに膨らむもの(３～５)とがある。後者には口縁部と体部の境に段をもつもの（３.４）がある。器面調整は前者では、口縁部が内外面とも横ナデ、体部は磨滅のため不明であり、後者では口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリで内面がヘラナデである。須恵器は甕の体部破片である。

堆積土中からは土師器の坏(１)・甕が出土している。坏は底部が平底気味で器高のある椀形のものである。器面調整は外面が口縁部が横ナデ、体部と底部はヘラケズリで、部分的にヘラミガキされた箇所がある。内面はヘラミガキで黒色処理されている。破片資料は床面出土資料と同様の特徴をもつものである。

(年代) 床面出土の土師器から、奈良時代の国分寺下層式とみられる。



No	出土層位	器種	特徴	No	出土層位	器種	特徴
1	第Ⅰ層	土師器坏	外面：口縁部横ナデ、体部～底部ヘラケズリ、一部ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ、黒色処理	4	床　面	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ、底部木葉痕　内面：口縁部横ナデ、体部ヘラナデ
2	床　面	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、体部不明　内面：口縁部横ナデ、体部不明	5	床　面	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ、底部木葉痕　内面：口縁部横ナデ、体部ヘラナデ
3	床　面	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、体部ナデ？　内面：口縁部横ナデ、体部ヘラナデ				

第14図　第３号竪穴住居跡・出土遺物

第１号炉跡（第15図）

(平面形・規模) 第７層の上面で確認され、ほぼ同じ位置にある第２号炉跡と重複し切られている。遺構は北半分が残存するが、南半分は斜面のため流失している。そのため壁はコの字形にめぐるが、もとは四周を巡ったものであろう。規模は東西約4.8m、南北3.6m以上である。

(壁･床面) 壁は比較的急に立ち上がり、高さは保存の良い部分で約25ｃｍである。床面は平坦であるが、やや南へ傾斜している。床面は全面が焼けているが、特に床面中央部が著しい。なお、側壁に沿って幅30～40ｃｍの溝がめぐるが、床面が焼けているにも関わらず、東壁の一部を除いて壁が焼けていないことや、後述する第２号炉跡を参考にすれば、この溝は壁にそって並んでいた石の抜き取り痕跡とみられる。

(堆積土) 焼土などを含む暗赤褐色シルトや灰褐色シルトが流れ込んだ状態で堆積している。厚さ約10ｃｍあり、この上面に第２号炉跡の床面が構築されている。

(出土遺物) 床面からは土師器の坏・甕 (17)、製塩土器が出土している。このうち坏は内外両面がミガキ調整され、黒色処理されたものである。甕は口縁部が外反し、体部が円筒状のものである。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリで、内面がナデである。製塩土器は後述する製塩土器Ⅱ類である。

堆積土からは土師器甕、須恵器甕・製塩土器が出土しているが、土師器と製塩土器の内容は床面出土のものと同じである。須恵器は体部破片である。

第２号炉跡（第16図）

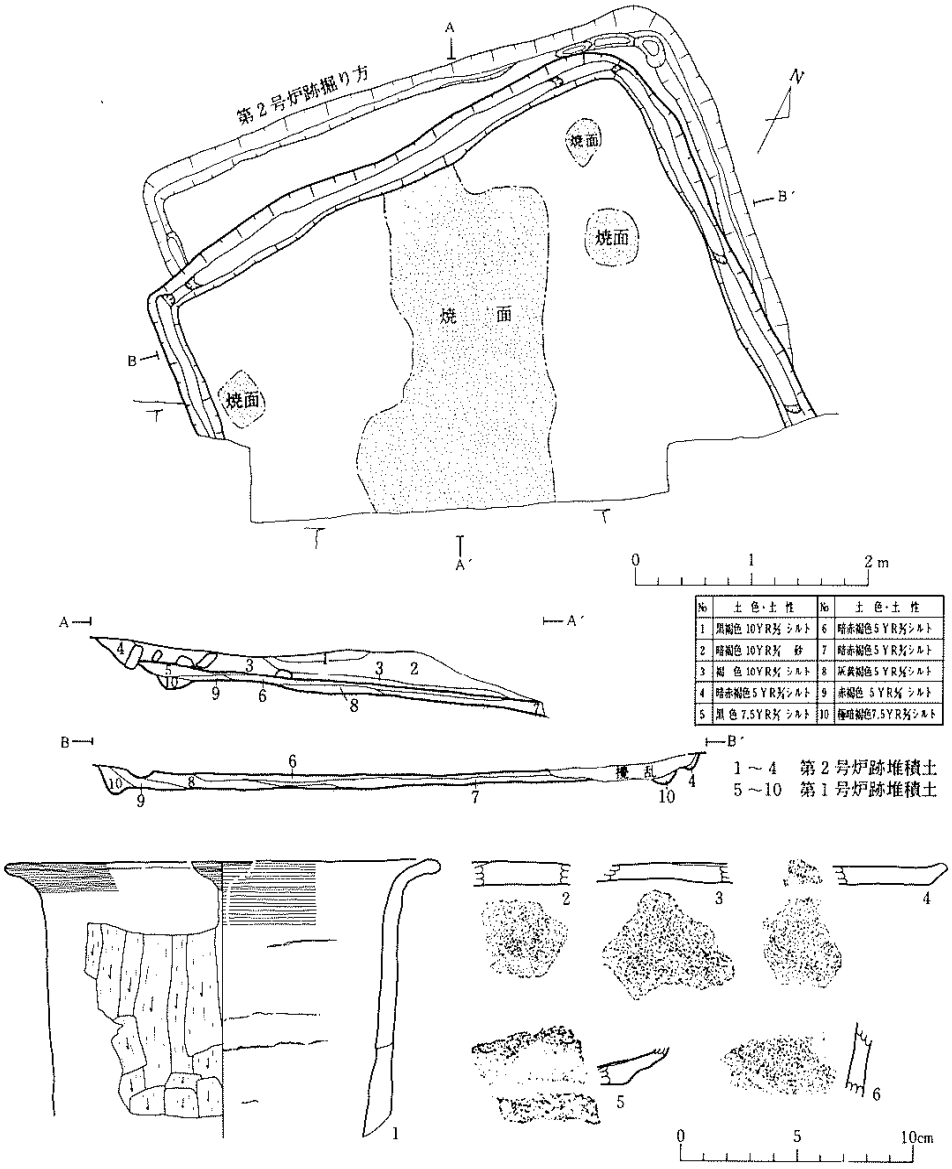
(平面形･規模) 第１号炉跡と同じく第７層上面で確認されたが、第１号炉跡の上部にほぼ重複して構築されている。遺構は北半分しか残存せず、壁はコの字形にめぐる形になるが、もとは四周を巡ったものであろう。規模は東西約4.6m、南北3.4m以上である。

(構築方法) 東西4.8m×南北3.6m以上の方形の掘りかたを掘り、壁に沿って20～50ｃｍの凝灰岩を並べて、裏込めをする一方で床面を作り上げている。東壁と西壁には凝灰岩の施設はないが、壁の近くまで床が焼けているのに壁面が焼けていないので、この部分は石が後からはずされたのであろう。

(壁・床面) 壁は垂直に立ち上がり、高さは保存の良い部分で約30ｃｍある。床面は平坦でほぼ全面が焼けているが、特に北壁際近くが良く焼けている。

(堆積土)焼土や多量の製塩土器片を含む暗褐色や灰褐色シルトが流れ込んだ状態で堆積している。層の厚さは約25ｃｍある。

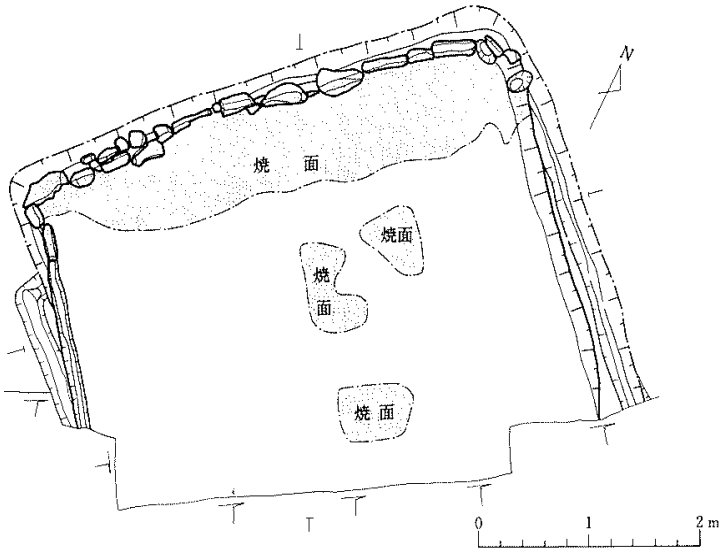
(出土遺物)掘り方や床面、堆積土中から遺物が出土している。掘り方と床面からはロクロ調整によらない土師器の甕・坏、少量の製塩土器（２.11)、鉄製品（16）が出土している。鉄製品は細長い板状のもので、一端が他端よりうすい。釘か楔として使用されたものと思われる。

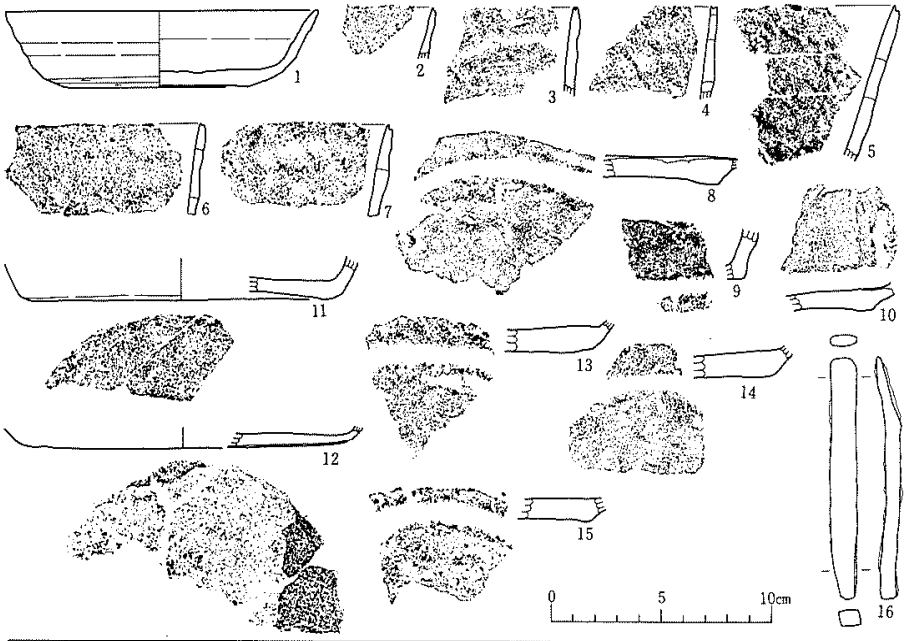


No	土色・土性	No	土色・土性
1	黒褐色 10YR3/2 シルト	6	暗赤褐色 5YR3/2 シルト
2	暗褐色 10YR3/4 砂	7	暗赤褐色 5YR3/2 シルト
3	褐色 10YR4/4 シルト	8	灰黄褐色 5YR4/2 シルト
4	暗赤褐色 5YR3/3 シルト	9	赤褐色 5YR4/4 シルト
5	黒色 7.5YR3/2 シルト	10	極暗褐色 7.5YR3/3 シルト

No.	出土層位	器種	特徴	No.	出土層位	器種	特徴
1	床面	土師器甕	外面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ　内面：口縁部横ナデ、体部ナデ	4	第６層	製塩土器Ⅱ類	底部外面：ナデ　内面：ナデ
2	床面	製塩土器Ⅱ類	底部外面：ナデ　内面：ナデ	5	第６層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
3	床面	製塩土器Ⅱ類	底部外面：ナデ　内面：ナデ	6	第６層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ

第15図　第１号炉跡・出土遺物





No.	出土層位	器　種	特　　徴	No.	出土層位	器　種種	特　　徴
1	第 3 層	須 恵 器 坏	体部下端～底部回転ヘラケズリ	9	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
2	床　　面	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ	10	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
3	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ	11	床　　面	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
4	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ	12	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
5	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ	13	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
6	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ	14	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
7	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：ナデ　内面：ナデ	15	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ
8	第 3 層	製塩土器Ⅱ類	外面：体部ナデ、底部ナデ　内面：ナデ	16	床　　面	鉄　製　品	

第16図　第２号炉跡・出土遺物

堆積土中からは土師器の坏・甕、須恵器の坏（1）、多量の製塩土器（整理用コンテナ５箱分、３～10．12～15）が出土している。須恵器の坏は体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリされているものである。なお、この第２号炉跡出土の製塩土器は後述する製塩土器Ⅱ類だけである。

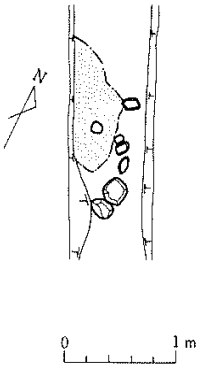
第３号炉跡（第18図）

（平面形・規模）最下層の第18層の下にある地山上面で確認した石敷の炉跡である。平面形は楕円形で、規模は東西約1.4m、南北約1.6mである。敷石の大半は不注意にも記録せずに取り去ったため、東側の一部しか図面に書き込まれていない。図には失われた敷石の部分を復元的に点線で示しておいた。

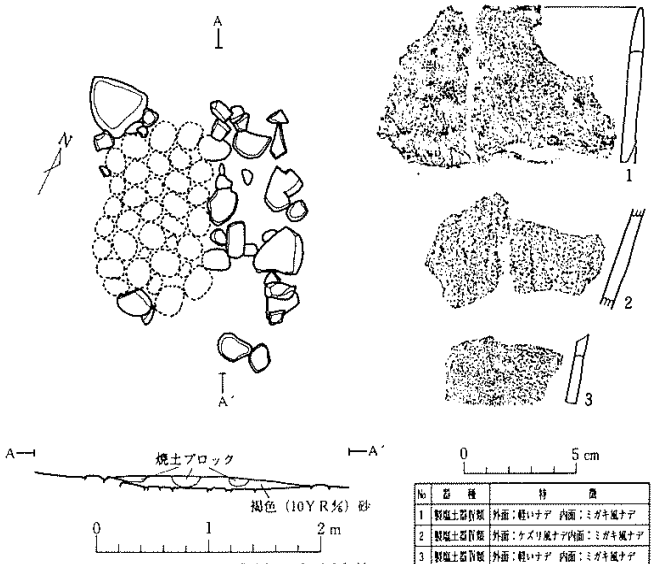
（構築方法）地面を浅く掘り窪め、その中に径10～30ｃｍほどの偏平な石を敷き詰めて床面を作り、それより幾分か大きめの石をその回りに配して壁としている。

（堆積土）床面上に焼土をブロック状に含む褐色の砂が堆積している。厚さ10ｃｍである。

（出土遺物）堆積土中および付近より製塩土器が出土している。すべて破片であるが、80点ある底部のうち79点が平底（製塩土器第Ⅳ類）で、尖底（製塩土器第Ⅲ類）は１点しかなかった。なお、製塩土器に混じって大洞Ｃ２式と大洞Ａ'式の破片が少量混在していた。



第17図　第４号炉跡



No	器種	特徴
1	製塩土器Ⅳ類	外面：軽いナデ　内面：ミガキ風ナデ
2	製塩土器Ⅳ類	外面：ケズリ風ナデ内面：ミガキ風ナデ
3	製塩土器Ⅳ類	外面：軽いナデ　内面：ミガキ風ナデ

第18図　第３号炉跡・出土遺物

第４号炉跡（第17図）

(平面形・規模) 断面を観察中に第18層上面で焼面が深さ15ｃｍほど皿状に窪んでいるのに気がつき、炉跡と確認された遺構である。そのため、平面は畦の部分でしか確認できず、東側の一部が残存していたにすぎない。したがって、形態・規模などは不明であるが、焼面の周囲に径15cm前後の焼けた石が見られた。しかし、人為的に配されたものかは判然としない。

(堆積土) 焼土を含む赤褐色シルトである。

(出土遺物)遺構から直接出土した遺物はないが、周辺に製塩土器の小片が散布していた。おそらく、後述する製塩土器Ⅲ類～Ⅳ類に属するものであろう。

３．遺物包含層からの出土遺物

新浜Ｂ遺跡にある堆積層（遺物包含層）は東西36m、南北15mの範囲に分布し、厚さは深いところで2.8mあった。含まれている遺物は平安時代･奈良時代･弥生時代･縄文時代の土器（製塩土器を含む）をはじめ、瓦・石器・鉄製品などがある。土器は小破片が多く、形を復元できたものは少ない。以下、図示できたものを中心に層位ごとに説明する。しかし、第10層から18層にかけては縄文時代晩期から弥生時代までの土器が混在しており、これらの層の出土遺物は一括して述べることにする。個別的な層位については図の観察表に示した。また、自然遺物と製塩土器については別項で説明することにする。

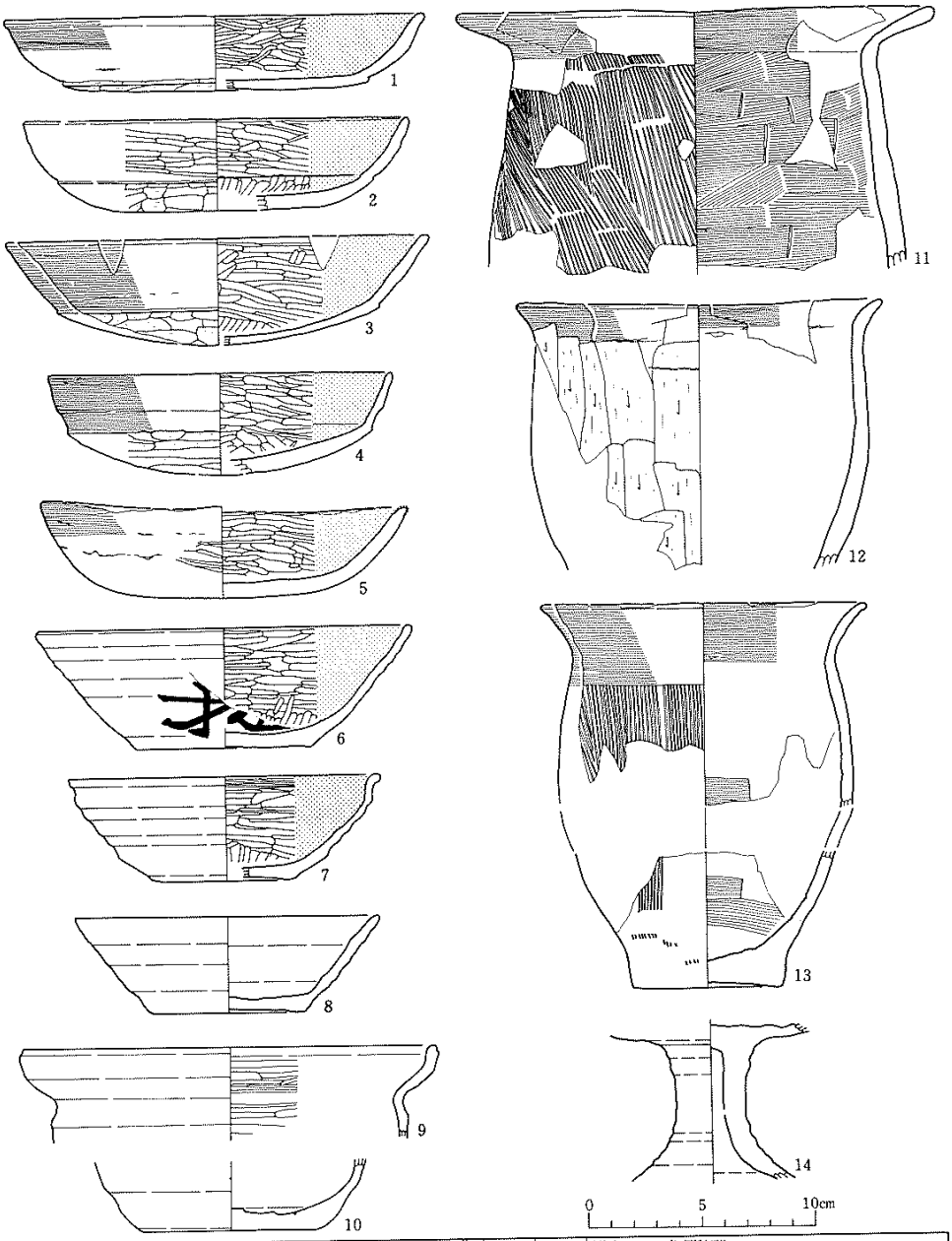
１．第１層（表土）出土遺物

土師器・須恵器・製塩土器などの小片と鉄製品 (27)･砥石が出土した。土器は第２層以下で出土している奈良･平安時代のものと同じである。鉄製品は偏平な板状のもので、一端に向かって次第に薄くなり、釘か楔の機能をもつものとみられる。

２．第２層出土遺物

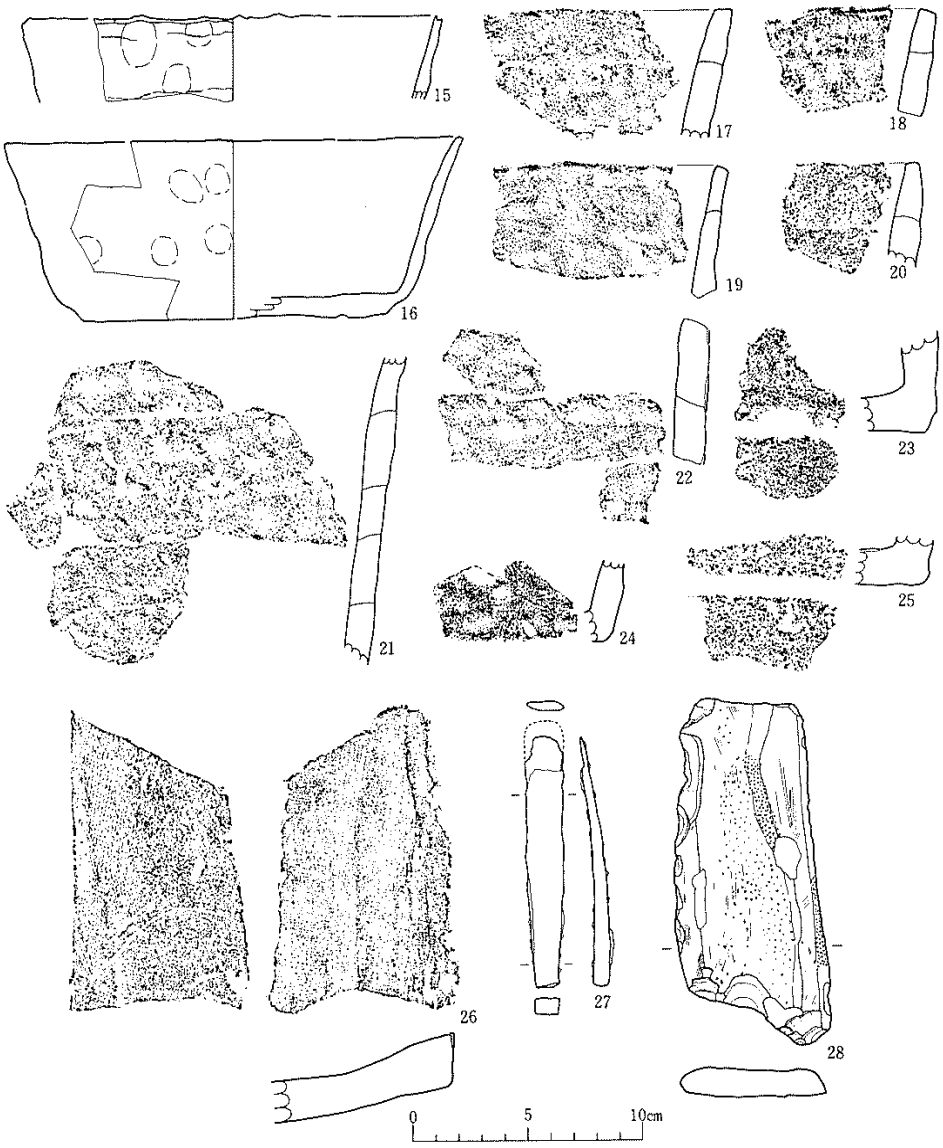
土師器と須恵器が出土している。

土師器には坏（６.７）と甕（９.10）がある。坏はいずれもロクロ調整しており、底部の切り離しは回転糸切りで、再調整はない。体部から口縁部へ直線的に外傾するもの（６）と体部が外傾し、口縁部はほぼ直立し、端部が外反するもの（７）とがある。内面はいずれもヘラミガキされ、黒色処理されている。６には墨書の文字があるが、欠損のため読むことが出来ない。他に破片資料では調整に際し、ロクロを使用していないものがある。甕は調整に際しロクロを使用したものである。９は口縁部が外反し、端部がほぼ直立するもので、内面はヘラミガキされている。10 は底部で、切り離しは回転糸切りで、再調整はない。器面調整は内外ともにロクロナデである。その他の破片資料では製作に際し、ロクロを使用しないものがあり、器面調整は外面がハケ目のものとヘラケズリ・ナデのものがある。須恵器には甕の体部破片がある。



No	層位・層位	器種	特徴	No	層位・層位	器種	特徴
1	F−14・8	土師器坏	外面：口縁−ヨコナデ、体−ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ・黒色処理	8	F−14・3	須恵器坏	内外面：ロクロ　底−回転糸切り
2	F−13・4	土師器坏	外面：口縁−ヘラミガキ、体−ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ・黒色処理	9	F−11・2	土師器甕	外面：ロクロ、内面：ヘラミガキ
3	E−14・4	土師器坏	外面：口縁−ヨコナデ、体−ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ・黒色処理	10	F−11・2	土師器甕	内外面：ロクロ　底−回転糸切り
4	E−14・8	土師器坏	外面：口縁−ヨコナデ、体−ヘラケズリ、内面：ヘラミガキ・黒色処理	11	E−14・8	土師器甕	外面：口縁−ヨコナデ、体−ハケ目、内面：口縁−ヨコナデ、体−ナデ
5	F−10・4	土師器坏	外面：口縁−ヨコナデ、内面：ヘラミガキ・黒色処理	12	E−14・4	土師器甕	外面：口縁−ヨコナデ、体−ケズリ、内面：口縁−ヨコナデ
6	F−11・2	土師器坏	外面：ロクロ　内面：ヘラミガキ・黒色処理、底−回転糸切り	13	E−15・3	土師器甕	外面：口縁−ヨコナデ、体−ハケ目、内面：口縁−ヨコナデ、体−ナデ、底−不明
7	F−11・2	土師器坏	外面：ロクロ　内面：ヘラミガキ・黒色処理　底−回転糸切り	14	E−12・7	須恵器高坏	内外面：ロクロ

第19図　堆積層出土遺物（1）



No	地区・層位	器　種	器面の特徴				
15	F−10・8	製塩土器Ⅱ類	外面：指頭状のオサエ　内面：ナデ	22	F−14・3	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ
16	E−10・8	製塩土器Ⅱ類	外面：指頭状のオサエ　内面：ナデ	23	F−14・2	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ
17	F−14・3	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ	24	E−14・2	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ
18	F−13~14・2	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ	25	F−13・2	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ
19	F−14・3	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ	26	F−10・5	平　瓦	凸面：布目→ナデ、凹面：布目→ナデ
20	F−14・2	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ	27	不　明	鉄製品	
21	F−14・3	製塩土器Ⅰ類	内外面：ナデ	28	F−13・8	砥　石	

第20図　堆積層出土遺物 (2)

３．第３層出土遺物

土師器と須恵器が出土している。

土師器には坏・甕（13）がある。坏は小破片であるが、調整に際しロクロを使用したものとしないものがある。いずれも内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。甕（13）は口縁部が外反し、体部が膨らむものである。器面調整をみると、外面は口縁部が横ナデ、体部がハケ目であり、内面は口縁部が横ナデ、体部がヘラナデである。

須恵器には坏(８)、甕がある。坏は底部の切り離しが回転糸切りで、再調整はない。体部から口縁部へ直線的に外傾する。甕は体部の破片である。

４．第４層出土遺物

土師器・須恵器が出土している。

土師器には坏(２.３.５)・甕(12)がある。坏はすべて丸底で、口縁部が内湾気味に外傾し、体部内外面に段があるもの(２)、口縁部が外傾し、段は外面の体部下端にあるが、内面には無いもの（３)、口縁部が内湾気味に外傾し、体部内外面に段は無いもの（５）などがある。これらの器面調整をみると、外面は口縁部がヘラミガキ（２）と横ナデのもの（３.５）があり、底部はすべてヘラケズリである。内面はすべてヘラミガキされ、黒色処理されている。その他の破片資料には、内外面かヘラミガキされ、黒色処理されているものがある。甕は口縁部が外反し、体部が膨らむもので、器面調整をみると、外面は口縁部が横ナデ、体部がヘラケズリされ、内面は口縁部が横ナデ、体部がナデである。その他の破片資料には体部外面がハケ目あるいはナデ調整されたものがある。

須恵器は甕の体部破片である。

５．第５層出土遺物

土師器の甕・須恵器の甕などの小片と瓦の破片が出土している。瓦（26）は　桶巻き作りのもので、凹凸両面ともナデ調整されており、多賀城跡の第Ⅰ期の瓦に相当するものである。

６．第６層出土遺物

土師器と須恵器の小片が出土している。

７．第７層出土遺物

土師器の甕・須恵器の高坏が出土している。高坏（14）は脚部の破片で、坏部と脚部下端を欠いている。

８．第８層出土遺物

土師器・須恵器・砥石（28）が出土している。

土師器は坏（1.4）・甕（11）がある。坏には口縁部が外傾し、体部内外面に段があり、丸底のもの(４)、外面の体部下端に段があるが、内面にはなく、底部は平底のもの（１）とがある。

器面調整をみるといずれも、外面は口縁部が横ナデ、底部がヘラケズリである。内面はすべてヘラミガキされ、黒色処理されている。甕は口縁部が外反し、体部が膨らむものである。器面調整は、外面は口縁部が横ナデ、体部がハケ目であり、内面は口縁部が横ナデ、体部がヘラナデである。その他の破片資料には体部外面がヘラケズリされているものがある。

須恵器には坏・甕がある。坏はいずれも小破片であるが、体部下端に回転ヘラケズリされたものがある。

なお、第４～８層は土師器からみて国分寺下層式期に属するものである。

９．第９層は無遺物層である。

10．第10層～18層出土遺物

すでに述べたように第10層～第18層では、縄文土器と弥生土器が混在していたので、一括してのべることにする。なお、出土土器については数が少ないので、これまでの土器型式にあてはめて説明することにする。

縄文時代晩期大洞ＢＣ式：羊歯状文をもつ壺形土器の肩部破片が１点ある（29)。

縄文時代晩期大洞Ｃ２式：皿形土器・壺形土器・深鉢形土器がある。

皿形土器（30）は１点ある。30 は口縁に４個の小突起をもち、体部に磨消縄文の手法による雲形文が描かれたもので、体部内面に一条の幅の狭い隆帯がめぐる。

壺形土器（33～35．85）は４点ある。33～35 は肩部の破片で、磨消縄文の手法による雲形文が描かれている。33 の外面は赤彩されている。85 は口頸部の破片で無文であるが、体部は縄文だけが施文されるものとみられる。

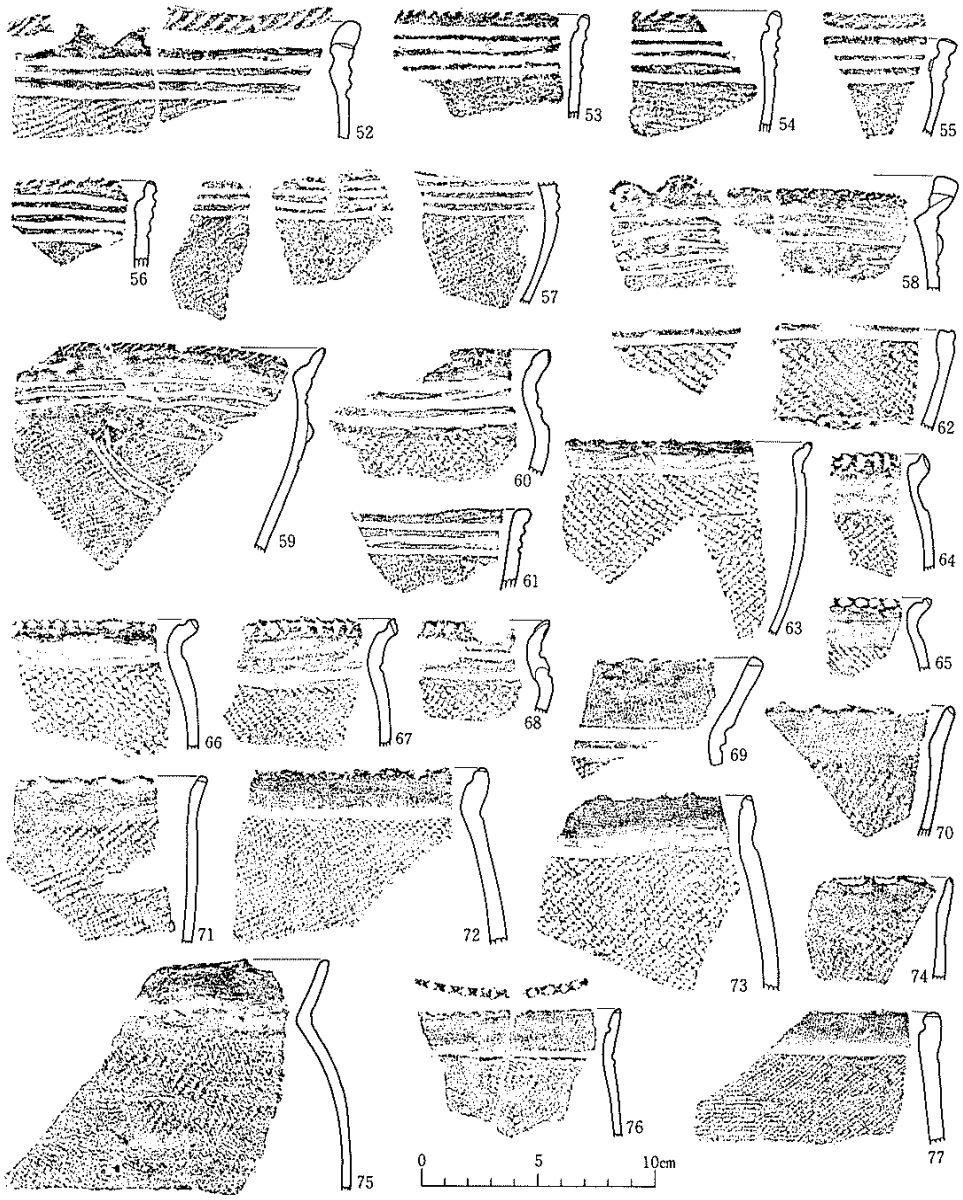
深鉢形土器（31．32．38．62．64～68．81．82）は比較的多数ある。口縁部の破片では区別が難しい鉢形土器を含めている。口頸部の形態により次のように大別される。①頸部が「く」の字状に屈曲するもので、頸部から肩部にかけて沈線文がめぐるものが多い。31・32 は沈線文に刺突が加えられている。38 は口縁部に山形突起をもち、口唇に刻み目が加えられている。②頸部がくびれるもので、口頸部は 68 に沈線がめぐるが、他は無文である。口唇に刻みをもつのが多い。口頸部と体部との境は比較的明瞭で、沈線で区別されるもの（67．68）と段で区別されるもの（64～66）とがある。③口頸部が直立するもので、62 は口縁部が肥厚しており、口縁直下に一条の沈線がめぐる。82 は体部に沈線で矢羽状の文様を横位あるいは斜位に描いたもので、類例は少ないが、東北歴史資料館による鳴瀬町里浜貝塚の西畑地区の調査で大洞Ｃ２式の層から良く似たものが数点出土している。

縄文時代晩期大洞Ａ'式：浅鉢形土器・深鉢形土器・壺形土器がある。

浅鉢形土器（36．37．40．89～91）は出土数が少ない。口頸部に沈線がめぐるもの（36．37）と無文のもの（40）とがある。89～91 は底部資料である。89 は短い突起様の脚が４個ついたも

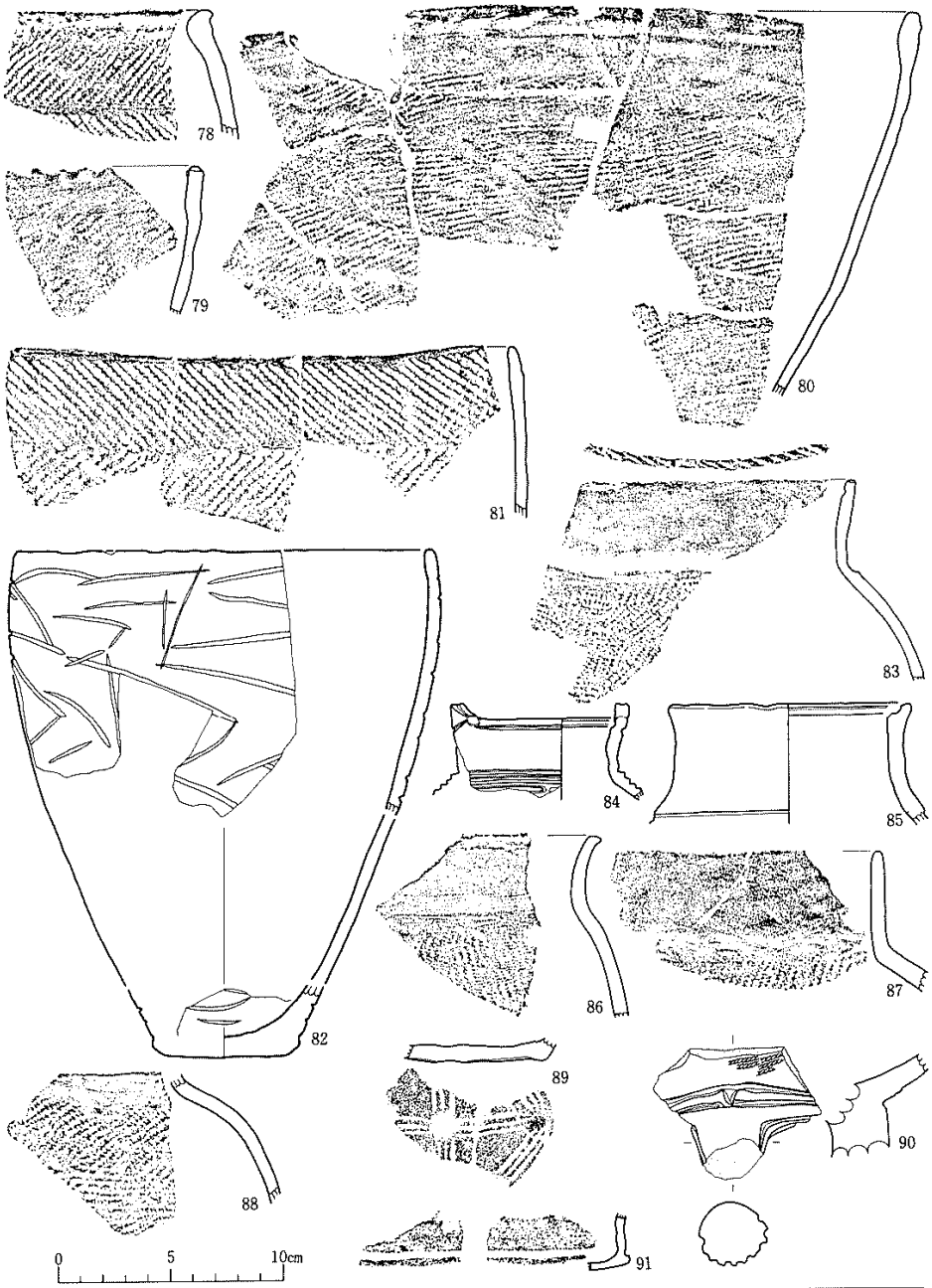
No.	地区・層位	器種	文様の特徴	No.	地区・層位	器種	文様の特徴
29	D～E－16・18	壺	羊歯状文	40	D－14・18	浅鉢	縄文LR
30	E－14・18	皿	雲形文、口縁上部－刻み目、縄文LR	41	F～G－14・18	深鉢	平行沈線
31	E－14・15	深鉢	横位沈線、沈線＋刺突、縄文LR	42	F－13・18b	深鉢	工字状文、口縁上端－刻み目
32	G－12・18	深鉢	平行沈線、刻み目、縄文LR	43	F－11・18b	深鉢	工字状文、口縁上端－刻み目
33	E－14・17	壺	雲形文、縄文LR、赤彩	44	F～G－14・18	深鉢	工字状文、縄文LR
34	E－13・18b	壺	雲形文、縄文LR	45	F－11・18b	深鉢	工字状文、縄文LR
35	E－10・18	壺	横位沈線、縄文LR	46	F－11・18b	深鉢	工字状文、
36	D－15・18	浅鉢	工字状文	47	F－13・18b	深鉢	工字状文、口縁上端－刻み目
37	F－13・18b	浅鉢	工字状文、縄文LR	48	F－11・18b	深鉢	工字状文、口縁上端－刻み目
38	F－12・12	深鉢	平行沈線、口縁上端－刻み目、縄文LR	49	E－12・12	深鉢	変形工字文、口縁上端－刻み目
39	F－11・14	深鉢	平行沈線、連続刺突	50	F－11・18b	深鉢	工字状文、口縁上端－刻み目、縄文LR
				51	D－13・14	深鉢	変形工字文、口縁上端－刻み目、縄文LR

第21図　堆積層出土遺物 (3)



No	地区・層位	器種	文様の特徴	65	E−14・15	深鉢	横位沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR
52	F−11・18b	深鉢	平行沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR	66	F−11・18b	深鉢	横位沈線、口縁上端−刻み目、縄文RL
53	F−11・18b	深鉢	工字状文、口縁上端−刻み目、縄文LR	67	D−12・16	深鉢	横位沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR
54	F−11・18b	深鉢	平行沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR	68	D−9・18	深鉢	横位沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR
55	F〜G−12・18c	深鉢	平行沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR	69	D〜E−16・18	深鉢	2条の横位沈線、縄文LR
56	F−11・18b	深鉢	平行沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR	70	D〜E−16・18	深鉢	小波状口縁、縄文LR
57	F−12・12	深鉢	平行沈線、縄文LR	71	E−12・12	深鉢	小波状口縁、縄文LR
58	F〜G−14・18c	深鉢	工字状文?、縄文LR	72	D−11・12	深鉢	横位沈線、小波状口縁、縄文LR
59	F〜G−14・18c	深鉢	平行沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR	73	E−12・18	深鉢	小波状口縁、縄文LR
60	D−16・18	深鉢	平行沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR	74	F−12・18c	深鉢	口縁上端−刺突、縄文LR
61	D−11・12	深鉢	平行沈線、縄文RL	75	D〜E−16・18	深鉢	縄文LR
62	D−15・18	深鉢	横位沈線、縄文RL	76	D−12・14	深鉢	横位沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR
63	D−12・16	深鉢	横位沈線、縄文RL	77	D−12・16	深鉢	小波状口縁、縄文LR
64	D−11・15	深鉢	横位沈線、口縁上端−刻み目、縄文LR				

第22図　堆積層出土遺物 (4)

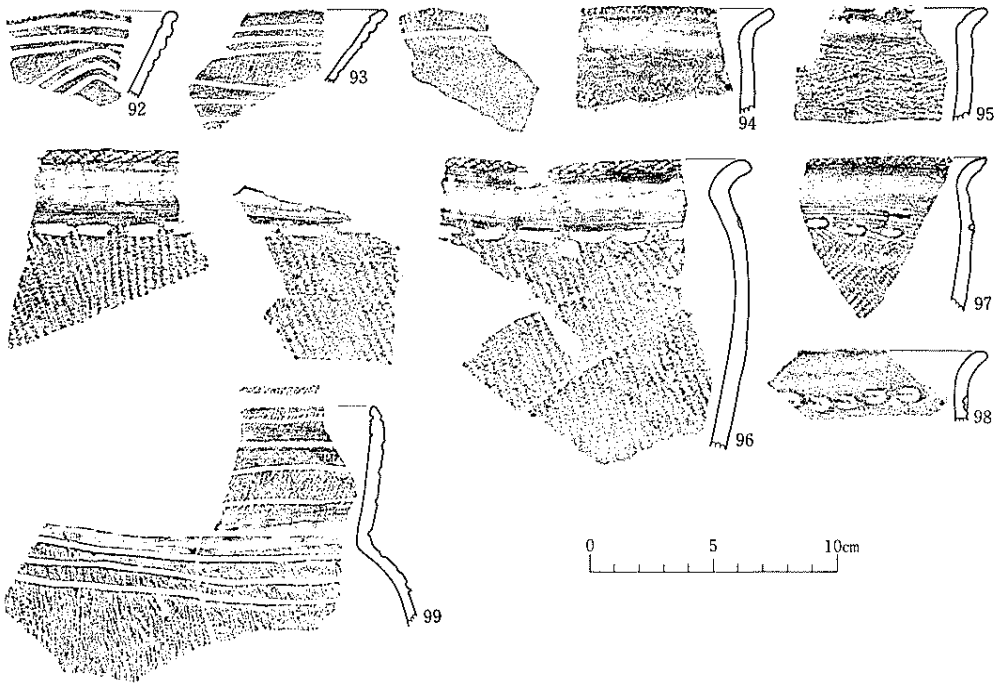


No.	地区・層位	器種	文様の特徴	85	D－14・18	壺	無文
78	D－12・16	深鉢	縄文LR・RL	86	D－12・16	深鉢	縄文LR
79	D－15・18	深鉢	縄文LR	87	F－11・18b	壺	縄文LR
80	F－11・18b	深鉢	縄文LR	88	E－12・12	壺	縄文LR
81	D－14・18	深鉢	縄文LR・RL	89	G－12・18C	浅鉢	平行沈線、脚付
82	D－14・18	深鉢	矢羽状沈線文	90	F～G－12・18C	浅鉢	工字状文・脚付
83	E－13・18	深鉢	口縁上端一刻み目、縄文LR	91	D～E－16・27	浅鉢	横位沈線
84	E～G－12・18C	壺	工字状文				

第23図　堆積層出土遺物 (5)

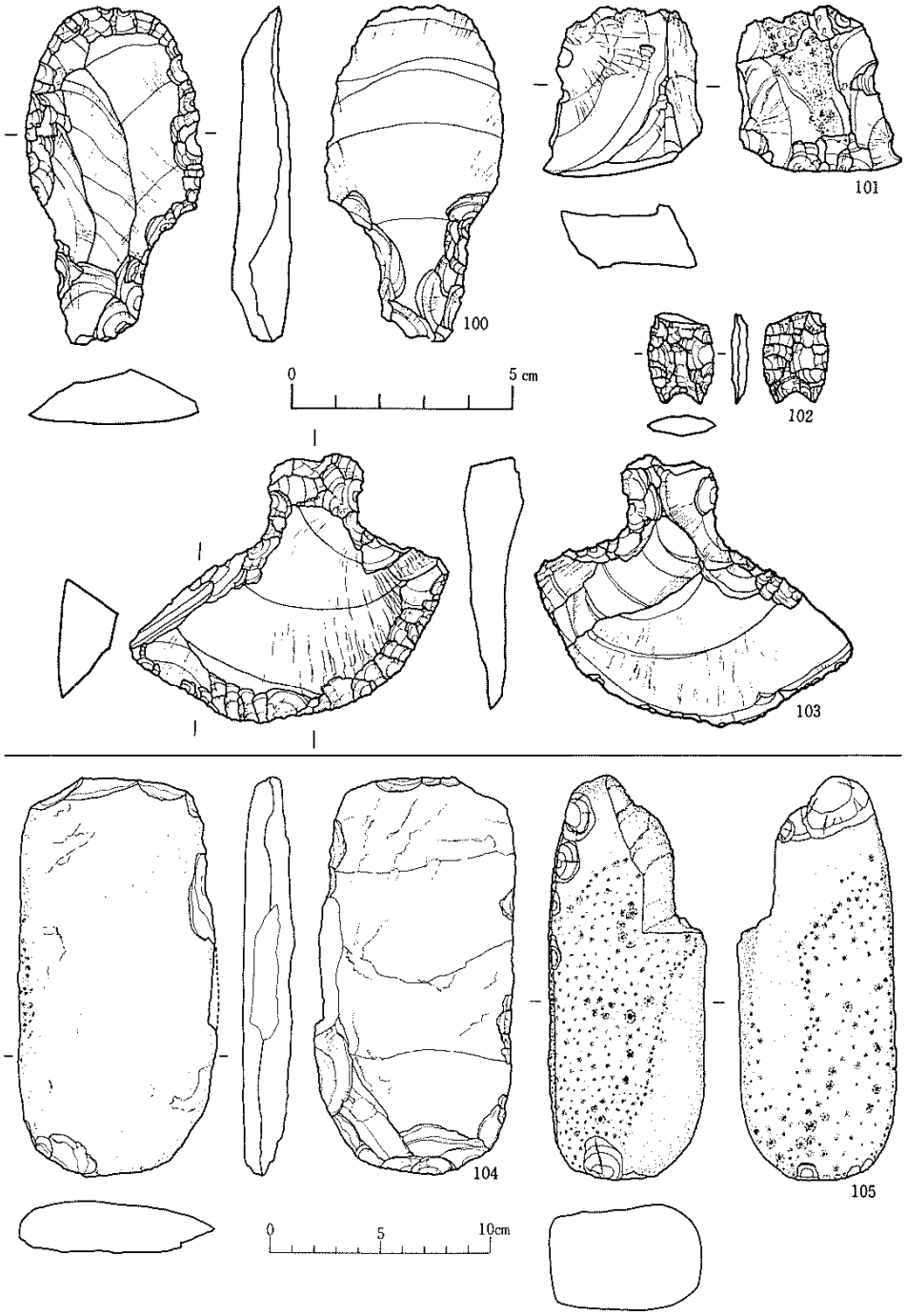
ので、各脚間は３条の平行沈線で連結されている。90 は棒状の脚がついたもので、91 は体部下端に一条の沈線がめぐっている。

深鉢形土器(41～61.63.69～80.83.86)は口縁部の破片では区別が難しい鉢形土器を含めている。出土量がもっとも多い器種である。口頸部の形状で次のように大別される。①口頸部が屈曲し、沈線によって文様が描かれるものである。文様には工字状文(41～48．50．53)、反転する沈線による変形工字文（49．51)、平行沈線文（52．54～61）などがある。ただし、破片の小さい資料では、平行沈線文としたものに工字状文が含まれている可能性がある。なお、口縁には、61 を除き、すべて刻み目が加えられている。また、口縁に突起がつくもの(41～45．47．50～52．58）もある。②頸部でくびれ、口頸部が無文のもの（63．69～77．79．83．86）である。口縁は大部分が小波状口縁のもの(63．69～73．77．79)で、他に刺突が加えられたもの(74．76)、頂部が二つにわかれた波状口縁となるもの（75）がある。また、体部との境が比較的明瞭なものと不明瞭なもの（70．71．74．79．86）とがあり、前者には沈線によるもの（69．76）と段によるもの（75．76．77．83）とがある。③は口頸部がほぼ直立するもの（80）である。口縁は平縁で、口縁部が肥厚するもので、口頸部は無文である。



No	地区・層位	器　種	文様の特徴	96	D－13・14	深　鉢	横位連続刺突、縄文ＬＲ
92	D－11・12	浅　鉢	波状文	97	D－12・16	深　鉢	横位連続刺突、縄文ＬＲ
93	F－14・10	浅　鉢	磨消縄文ＬＲ	98	G－12・18C	深　鉢	横位連続刺突
94	E－10・18	深　鉢	縄文ＬＲ	99	D－13・14	深　鉢	平行沈線、付加縄文
95	D－12・16	深　鉢	縄文ＬＲ				

第24図　堆積層出土遺物 (6)



No.	地区・層位	器種	特徴	No.	地区・層位	器種	特徴	No.	地区・層位	器種	特徴
100	E−15・16	掻器	表側に二次加工	102	E−13・18	石鏃	無茎	104	E−15・16	石鏃	表側自然面
101	E−12・14	石核		103	E−12・18	石匙	横型	105	F−12・18C	敲石	全面に敲打痕

第25図　堆積層出土遺物 (7)

壺形土器（84．87）は数が少ない。84は口縁に一個の山形突起をもち、口縁直下の内外面に一条の沈線がめぐるもので、肩部には工字状文が施文されている。87 は口頸部が無文のもので、体部に縄文が施文される。

弥生時代大泉式：１点ある(92)。浅鉢形土器で口頸部は直線的に外煩する。口縁に低い山形突起をもち、体部に平行沈線と波状文がめぐる。

弥生時代桝形囲式：浅鉢形土器と深鉢形土器がある。

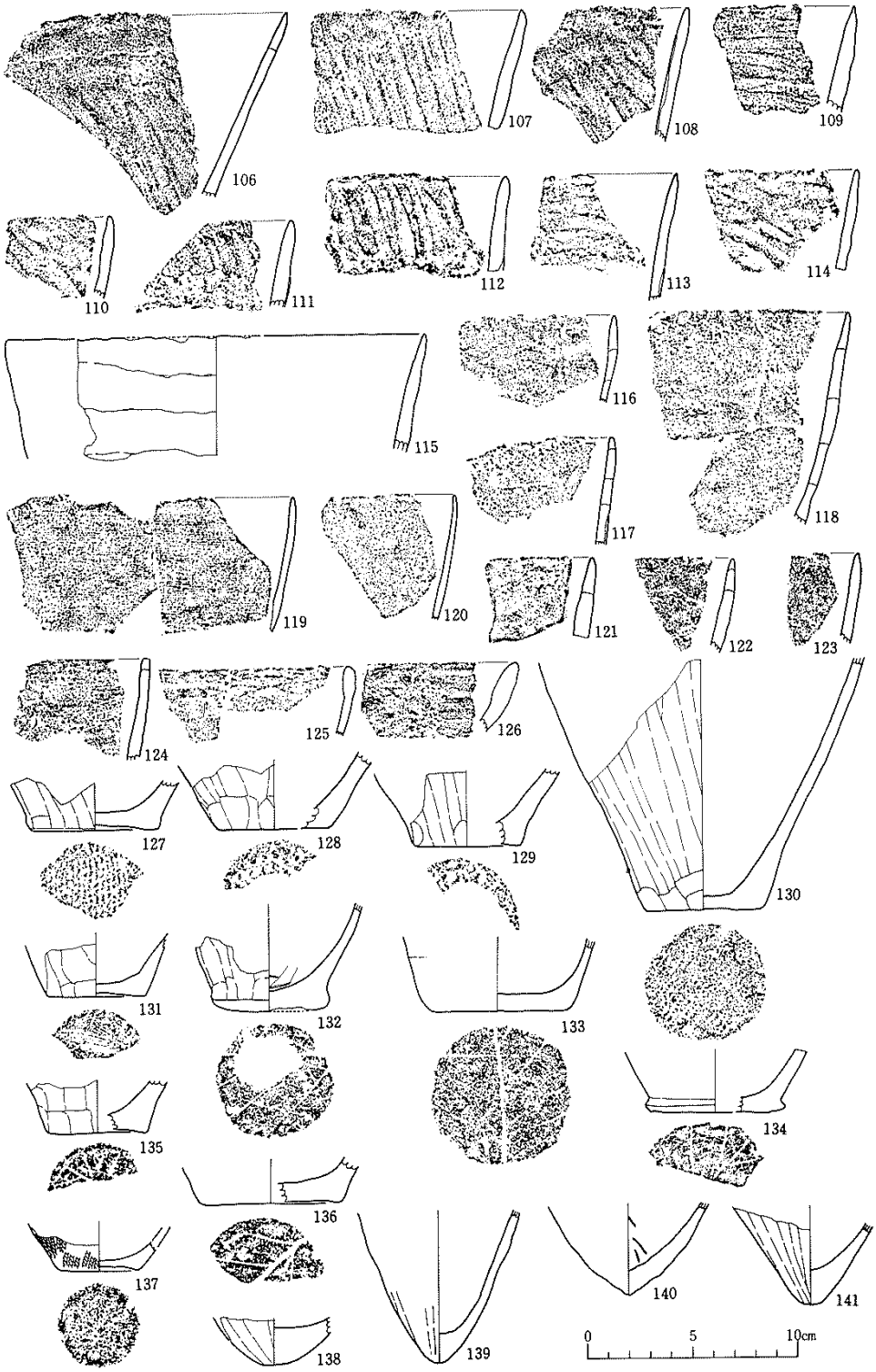
浅鉢形土器（93）は１点ある。口頸部が屈曲するもので、低い山形突起をもち、平行沈線と斜行沈線が施文され、その間にＬＲ縄文がみられる。口縁部内側に一条の沈線がめぐり、口縁との間にＬＲ縄文が施文されている。

深鉢形土器は口頸部の形状で二大別される。①口頸部が外反するもので、頸部に列点文がめぐるもの（96〜98）とめぐらないもの（94.95）とがある。口唇部に体部と同じ原体の縄文（96.97）あるいは撚糸文（94．95）が施される。また、96の内面には籾痕がついている。②口頸部がほぼ直立するもので、体部が膨らみをもち、壺形に似た器形となる(99)。口頸部と肩部に平行沈線がめぐり、口縁と平行沈線間と体部に付加縄文が施されている。

石器・石核・石鏃・掻器・石匙・石鍬・敲石・剥片がある。剥片は３点あるが、他は１点ずつである。年代は上記の諸型式に属すると思われるものである。混在のため明確なことは不明である。

石核(101)は最終剥離面がネガティブであるため石核とみなした。図の下端は折り取られており、石器の未製品である可能性もある。石鏃(102)は無茎で、抉りのはいる基部をもち、先端は欠損している。両面とも丁寧な押圧剥離で作られている。掻器(100)は二次加工により剥片の先端部側に刃部、打面側に基部を作り出している。石匙(103)は横長剥片を素材とした横型の石匙である。石鍬(104)は偏平な長楕円形の礫を半裁したものを使用しており、一面は自然面である。下端部に粗い剥離を施している。また、図の右側辺の中央部に敲打痕がみられる。敲石(105)は長楕円形の礫を素材としたもので、面取りした部分もあり、断面形は方形である。図の表裏両面と右側辺に敲打痕がみられる。剥片はいずれも欠損したもので、二次加工のみられるものもある。図は省略した。

No.	地区・層位	器面の特徴
106	D〜15・18	外面：ケズリ風ナデ 内面：ミガキ風ナデ
107	E−15・18	
108	D−14・18	
109	D−12・18	
110	D−16・18	
111	D〜E−16・18	
112	D〜E−16・18	
113	D〜E−16・18	
114	D−16・18	
115	E−15・18	外面：軽いナデ 内面：ミガキ風ナデ
116	G−12・18	
117	F〜12・12	
118	D−14・13	外面：軽いナデ 内面：ミガキ風ナデ
119	E−16・18	
120	E〜12・15	
121	E〜15・18	
122	D−15・17	
123	D−15・18	
124	D〜E−16・18	
125	D−13・14	
126	E−14・15	
127	D〜E−16・18	外面：ケズリ風ナデ 内面：ミガキ風ナデ 底部：網代痕
128	D−14・18	
129	D〜E−16・18	
130	D〜E−16・18	
131	E−13・18	外面：ケズリ風ナデ　内面：ミガキ風ナデ、底部：ケズリ
132	E−14・15	外面：ケズリ風ナデ、内面：ミガキ風ナデ　底部：木葉痕
133	E−12・18	外面：ナデ　底部：木葉痕
134	E−12・18	内面：ミガキ風ナデ
135	E〜9・18	外面：ケズリ風ナデ　内面：ミガキ風ナデ　底部：木葉痕
136	D−15・18	外面：ナデ　内面：ミガキ風ナデ　底部：木葉痕
137	G−12・18a	外面：縄文ＬＲ　内面：ミガキ風ナデ
138	F−11・18	外面：ナデ 内面：ミガキ風ナデ
139	F−12・18	
140	F−15・16	
141	F〜G−12・18C	



第26図　第10～18層出土製塩土器

４．自然遺物

堆積層(基本層位)の第４・６・８層と第２号竪穴住居跡の堆積土中の貝層をすべて採集し、１mmメッシュの篩にかけて魚骨など微細な自然遺物の検出につとめた。しかし、表１の如く、貝類を除く自然遺物はごく少量で、集落に伴う貝塚とは異なった在り方である。これは、新浜遺跡が製塩を行う季節的な労働の場のみであったことと関係があると思われる。なお、出土した土師器から第２号竪穴住居跡は平安時代、第４・６・８層は奈良時代に属するものである。貝層の主体はカキとアサリであるが、傾向として奈良時代はカキが多く、平安時代になるとアサリが多くなるようである。第５層からウシの足の骨が出土しているが、この時代にこの地方でウシを飼育していたことを示すものであろう。

表２　自然遺物の表

軟体動物		2住	4層	6層	8層	軟体動物		2住	4層	6層	8層
腹足綱	イシダタミ	56	11	9	20	腹足綱	ユキノカサ科	8	24	2	47
	クボガイ	70	1	4	9		ムシロガイ科	—	—	2	1
	スガイ	151	314	82	412	斧足綱	カキ	3416	688	477	3416
	ウミニナ	107	666	196	823		アサリ	3001	963	888	3001
	アラムシロ	6	17	6	3		オキシジミ	97	17	7	53
	オオヨウラク	9	6	2	10		イガイ	25	106	8	133
	タマキビ	12	48	17	101		シオフキ	124	4	42	31
	アカニシ	7	—	7	8		サルボウ	1	—	—	1
	イボニシ	—	—	1	2		ハマグリ	—	1	—	1
	レイシ	—	—	—	5		オオノガイ	—	1	—	1
	ヒナシダタミ	1	—	—	—		ウネナシトマヤガイ	1	—	—	1
	マクテンスマツムシ	4	23	13	5		チヨノハナガイ	2	—	—	—
	オオヘビガイ	1	1	1	3		ニッコウガイ	1	—	—	—
	サンショウガイ	1	—	—	—		不明	17	40	4	105
合計											

脊椎動物		2住	4層	6層	8層
魚門	サメ				○
	エイ	○	○	○	○
	スズキ		○	○	○
	タイ				○
	フグ				○
	アイナメ				○
	イワシ			○	
	カサゴ				○
その他	キジ				
	シカ				○
	ウシ	（5層出土）			

５．考　察

製塩土器の分類

新浜Ｂ遺跡で出土した製塩土器は、すべて火熱のため小さい破片となり、全体の形を知ることが出来ないものが多い。底部の形態や調整の種類などによって次の４類に大別される。器高や口径のわかるものは殆どない。成形はすべて粘土紐の輪積みによるとみられる。

第Ⅰ類－第２号竪穴住居跡の床面や堆積土からまとまって出土しているものである。第１号竪穴住居跡の堆積土および堆積層（基本層位）の第２・３層にも若干ある。第Ⅱ類と同じく大形の平底をもち、器形も類似するものと考えられるが、底部からの立ち上がりが直角に近い点でちがいがみられる。法量も第Ⅱ類より大きいようである。また、器厚は1.0～1.5ｃｍもあり、第Ⅱ～Ⅳ類とくらべかなり厚いものとなる。調整は内面が平滑にナデられているが、外面は軽くナデたのちに粘土紐の重ね目を指で押さえているだけなので重ね目がよく残る。口縁部は内外・口唇ともに横ナデされ、角張った口縁端となるのも特徴である。

第Ⅱ類－第１・２号炉跡からまとまって出土しているものである。器形は盥のような浅い形である。大型の平底となり、底部からの立ち上がりはやや外反するが、体部から口縁部にかけては直立する。器厚は底部から外反し、直立に移る部分から急に薄くなるようである。復元可能なものが１個(16)あり、その法量は器高7.5ｃｍ、口径20ｃｍ、底径13ｃｍである。調整は内面が平滑にナデられているが、外面は軽くナデたのちに粘土紐の重ね目を指で押さえているだけなので重ね目がよく残る。口唇部は横ナデをしたのちに、口縁部内外とくに内側を横ナデするために、口縁部がやや薄くなると同時に口縁端部に粘土が僅かにはみ出し、口唇に溝状あるいは段状のものができるものが多い。

第Ⅲ類(138～141)－これのみが遺構でまとまって出土したものはなく、堆積層の第10～18層から製塩土器第Ⅳ類と混在して出土している。底部は尖底となる。器形は深鉢形とみられる。

第Ⅳ類(127～136)－第３号炉跡の堆積土およびその付近でまとまって出土しているが、堆積層の第10～18層では前述の製塩土器第Ⅲ類と混在している。径５ｃｍ前後の小型平底となり、底面に網代痕（127～130）や木葉痕（132～136）がみられる。なお、底部の形態には底部縁辺が外へ張り出すもの（132.134）も少量ある。器形は深鉢形とみられる。

なお、第10～18層から出土する製塩土器の口縁部は、次のように２大別される。①は口縁部の外側が削ぎとったようになり、口唇の断面は尖った形になる。調整は外面が幅８mmほどの縦方向のケズリ風のナデとなり、内面がミガキ風ナデとなる。外面のナデは粘土の柔らかいうちに行うため、粘土の動きが大きく、単位が明瞭である(106～114)。②は口縁部の外側が削ぎとったようになり、口唇の断面は尖った形になる点は①と似るが、断面の調整が異なる。外面は軽いナデのみで粘土紐の重ね目が残るものが多い (115～123)。内面がミガキ風ナデとなる。

①・②と底部との接合資料はなく、不明な点が多いが、やや大きめの資料で観察すると、①は製塩土器第Ⅳ類に多く、②は第Ⅲ類に多いようであるが、断定できない。

Ｂ．遺構と製塩土器の関係

第１・２号竪穴住居跡は内部から出土した生活用の土師器が表杉ノ入式であり、時期は平安時代の前期（９世紀頃）に属するとみられる。製塩土器第Ⅰ類もこの時期のものであるが、製塩遺構は発見されなかった。汀線に近い所につくられたため、波浪で流されたのかもしれない。竪穴住居跡は製塩に従事した人々が仕事の期間だけ利用する季節的なものであろう。

第３号竪穴住居跡は内部から出土した土師器が国分寺下層式であり、時期は奈良時代（８世紀）である。製塩土器Ⅱ類はこの時期のもので、第１・２号炉跡で使用されたものである。盥のように浅い平底の製塩土器を炉の床面にどのように並べたのかは不明である。製塩土器を床面から浮かすために使用したと思われる石や土製支脚のようなものは発見されなかった。

第３号窯跡は18層の下の地山面に構築されたもので、製塩土器第Ⅳ類が主として使用された製塩炉跡である。堆積土および付近から出土した土器から縄文時代晩期の大洞Ｃ２式あるいは大洞Ａ式に属するとみられる。しかし、後述するように、里浜貝塚西畑地区では大洞Ｃ２式に伴う製塩土器は殆ど平底であり、鬼ノ神山貝塚・一本杉貝塚・二月田貝塚などに於いて大洞Ａ式および大洞Ａ'式に伴うものは尖底が中心となっている。したがって、製塩土器第Ⅳ類がまとまって出土した第３号炉跡は大洞Ｃ２式に属する可能性が強い。

第４号炉跡も第３号炉跡と同じような製塩炉と思われるが、詳細は不明である。製塩炉であるとすれば、製塩土器第Ⅲ・Ⅳ類が単独で、あるいは一緒に使用されたとみられる。

弥生時代に属する製塩炉跡や竪穴住居跡などの遺構は発見されなかった。しかし、遺跡の立地条件を考えれば、弥生時代の人々も製塩のためにこの海浜を利用したのであろう。もし、堆積層に弥生時代の製塩土器が含まれているとすると、鳳寿寺貝塚の例から考えて、平底と尖底両方の製塩土器すなわち第Ⅲ類・第Ⅳ類が一緒に利用されている可能性がある。

他の遺跡出土の製塩土器との比較

第Ⅳ類土器が小型平底である点を強調すれば、同様なものは里浜貝塚西畑地区の大洞Ｃ２式に伴って大量に出土している(文献⑫)。尖底の製塩土器のよりも早く平底の製塩土器があったことは確実である。土器の形態もよく似ている。

第Ⅲ類土器が尖底である点を強調すれば、同様なものは大洞Ａ式にともなって沼津貝塚（石巻市)、里浜貝塚寺下地区（鳴瀬町、文献⑬)、林崎貝塚(文献⑭)・二月田貝塚（文献⑮、以上、七ケ浜町)、一本松貝塚（塩釜市、文献⑯）などの発掘調査で出土している。また、大洞Ａ'式にともなって鬼ノ神山貝塚（七ケ浜町、文献⑰）で出土している。

第III類と第IV類が共伴している例は、弥生時代の鳳寿寺貝塚（七ケ浜町、文献⑬）で桝形囲式に伴ってみられる。なお、鳳寿寺貝塚では尖底の先端を切り取ったような小さな平底もある。

第II類はこれまでの報告書などで類例を探すことはできなかった。梅ケ浜遺跡（塩釜市、文献⑲）や館ケ崎遺跡（松島町、文献⑳）の報告書では奈良～平安初期の製塩土器が図示されているが、第II類より第I類に似ているものである。鳳寿寺貝塚や館ケ崎遺跡のものは共伴する土師器がロクロ使用のものというので、平安時代に入るものと考えたほうがよい。

第I類は平安時代の江ノ浜貝塚（鳴瀬町）や梅ケ浜遺跡（塩釜市）のほか前述した鳳寿寺貝塚や館ケ崎遺跡などで出土している。松島湾に多数分布する製塩遺跡はこの第I類を出土するものが大部分と見てよいほどこの地域では普遍的な製塩土器である。なお、江ノ浜貝塚や梅ケ浜遺跡、館ケ崎遺跡では筒形の土製支脚が少量伴うが、新浜遺跡では見られなかった。また、館ケ崎遺跡の汀線付近で金津匡伸氏（仙台在住）が採集した資料のなかには、胎土に籾殻が大量に含まれている第I類に似た製塩土器が多数あり、土製支脚もみられた。また、器形が第I類によく似ているにもかかわらず、比較的器厚が薄いものも松島湾各地の製塩遺跡で発見されているので、平安時代の製塩土器はまだまだ細分が出来そうである。

なお、宮城県内に於いては製塩遺跡以外の遺跡でも製塩土器に類似した土器が出土しているが内容を吟味することが出来なかったので、遺跡と文献のみを紹介しておこう。

	市町村	遺跡名	製塩土器の内容	年代	文献
1	田尻町	中沢目貝塚	深鉢	縄文時代晩期	文献㉑，59頁
2	七ケ宿町	小梁川遺跡	筒形土器と表現	平安時代	文献㉒，58頁
3	白石市	家老内遺跡	筒形土器と表現	平安時代	文献㉓，57頁
4	名取市	清水遺跡	筒形土器と表現	平安時代	文献㉔，108頁
5	多賀城市	多賀城第37次	多数あり，第I類	平安時代	文献㉕，67頁

V．まとめ

1．新浜A・B遺跡は松島湾に面する小さな浜辺に立地する。

2．新浜A遺跡では、明治時代前半に貝灰を生産した窯跡が発見された。江戸時代後半に属する窯跡もあるが、貝灰生産のためか塩生産をおこなったものかは不明であった。貝灰生産遺構の考古学的調査は全国でも数少なく、貴重である。貝灰生産の目的はいろいろあると思われるが、松島湾各地の塩田で竈・鹹水溜などの施設をつくる際に粘土とまぜて使用するのが、大きな目的の一つとみられる。

3．新浜B遺跡では、縄文・弥生・奈良・平安時代の製塩土器が発見された。縄文・奈良時代

については製塩炉跡も検出することができた。奈良・平安時代の竪穴住居跡があるが、これは製塩に従事した人々が仕事の間だけ住んだ季節的なものであったと思われる。しかし、平安時代の製塩炉跡はついに発見することができなかった。なお、奈良時代のものは製塩炉と製塩土器を具体的に把握することができ、仙台湾における古代製塩史に重要な資料を提供することができた。

新浜遺跡関係文献目録

① 永沢譲治 「陸前国塩釜港字崎山囲洞窟の石器及び古墳時代遺跡に関する略報」『史前学雑誌』３巻１号、６～17 頁、1931 年。

② 加藤　孝 「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集』８号、111～124 頁、1954 年。

③ 伊東信雄・伊藤玄三 「崎山囲洞穴遺跡調査概報」『宮城県文化財調査報告書』８集、１～８頁、1965 年。

④ 木村敏郎 「大浜遺跡発掘調査」『石巻市文化財たより』８号、１～６頁、1979 年。

⑤「塩釜町方留書」『塩釜市史』５巻、１～168 頁、1965 年。

⑥「仙台領鉱物調」『宮城県史』32 巻、196～256 頁。

⑦ 橋本鉄男 「貝窯ノート」『物質文化』23 頁、45～55 年、1974 年。

⑧『気仙沼本郷旧事記』

⑨ 渡波町史編委員会　『渡波町史』1959 年。

⑩ 市立市川博物館『行徳の塩』1977 年、（市川市教育委員会　発行）

⑪ 岡村道雄 「里浜貝塚」『東北歴史資料館資料集』５集、1982 年。

⑫ 角田文衛 「陸前里浜貝塚の尖底土器」『史前学雑誌』８巻５号、17～26 頁、1936 年。

⑬ 加藤　孝 「考古学上より見た塩竈市周辺の遺跡」『塩釜市史』３巻、１～80 頁、1960 年。

⑭ 塩釜女子高等学校社会部 「宮城県七ケ浜町二月田貝塚第二次発掘調査報告」『貝輪』７号、１～31 頁、1972 年。

⑮ 加藤　孝 「塩釜市一本松貝塚の調査」『地域社会』３．４号、47～53 頁、1952 年。

⑯ 鴇田勝彦・桜井幸喜 『鬼ノ神山貝塚・野山遺跡』1982 年、七ケ浜町教育委員会発行

⑰ 塩釜女子高等学校社会部 「宮城県宮城郡七ケ浜町東宮浜鳳寿寺貝塚の調査報告」『貝輪』２号、３～19 頁、1965 年。

⑱ 塩釜女子高等学校社会部 「宮城県塩釜市浦戸石浜梅ケ浜製塩遺跡の発掘調査報告」『貝輪』３号、５～18 頁、1968 年。

⑲ 加藤　孝 「宮城県宮城郡松島町磯崎西ノ浜館ケ崎古代製塩遺跡出土品目録の作成」東北学院大学日本文化研究所紀要　９巻　56～113 頁、1978 年。

⑳ 須藤隆他 『中沢目貝塚』東北大学文学部考古学研究会　1984 年。

㉑ 新庄屋元晴・真山　悟 「小梁川遺跡(古代編)ー七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』107 集、１～97 頁、1985 年。

㉒ 真山　悟 「家老内遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』81 集、41～94 頁、1981 年。

㉓ 丹羽　茂・阿部博志・小野寺祥一郎 「清水遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』77 集、３～540 頁、1981 年。

㉔ 白鳥良一『多賀城跡ー宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980』1981 年。

写　真　図　版

図版1

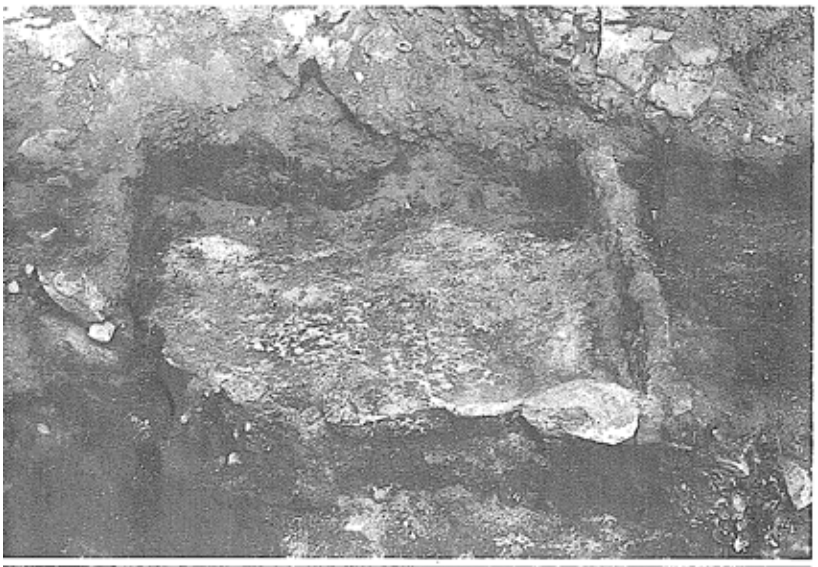
新浜A遺跡近景

調査後の状況

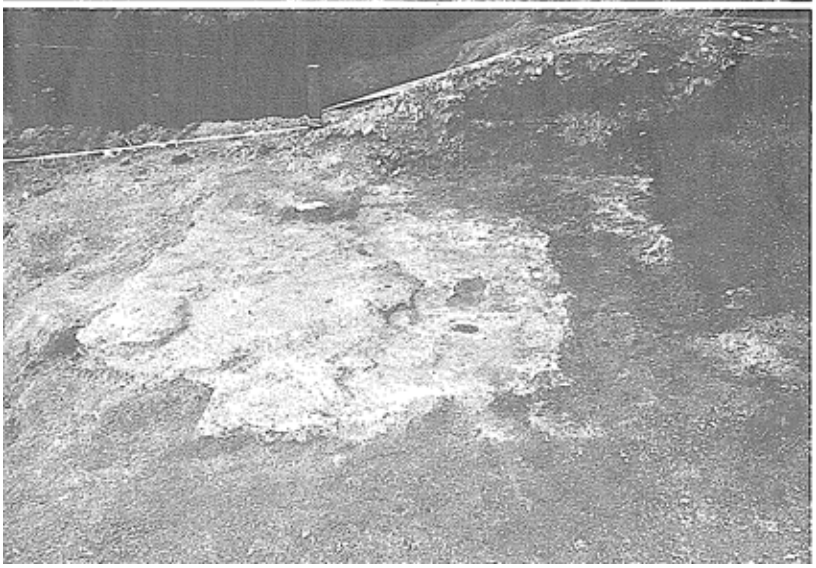
第1号窯

図版2

第 2 号 窯



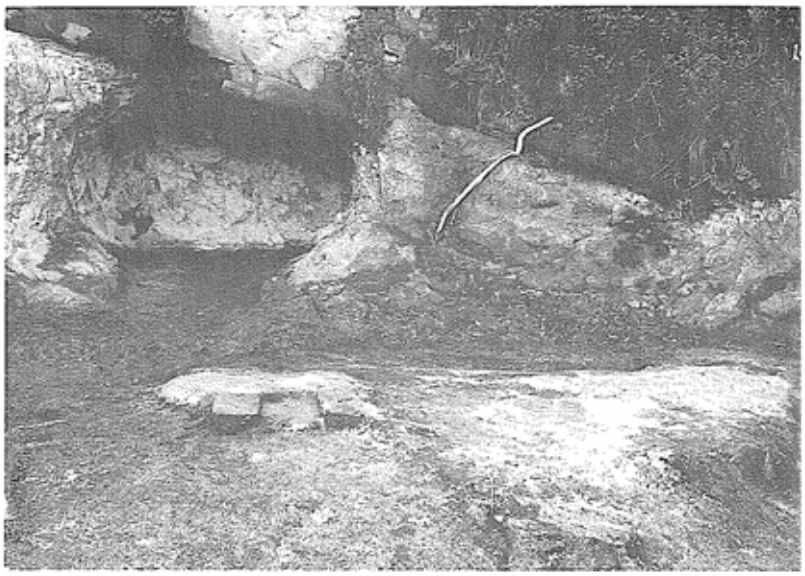
第 3 号 窯

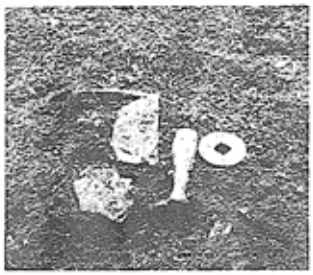


第3号窯貝灰層

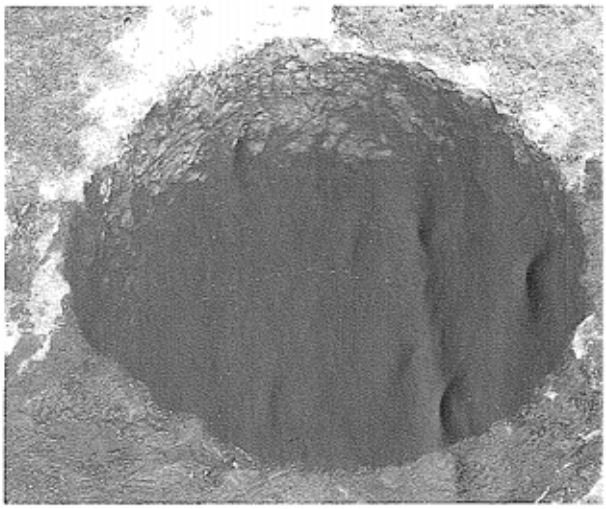
図版 3

第４号窯(洞窟)と石組炉





貝灰層中の遺物出土状況
(寛永通宝・キセル)



土　壙

陶　器(底部)

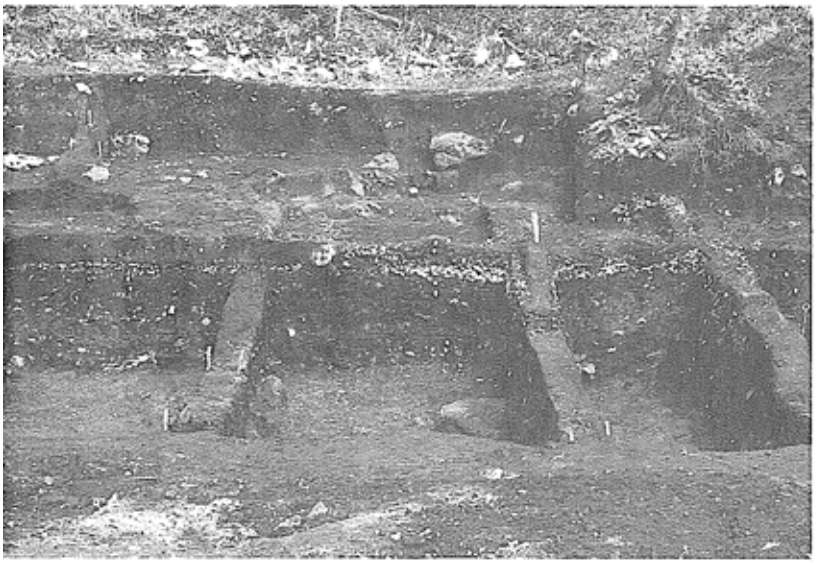
石　核

陶磁器

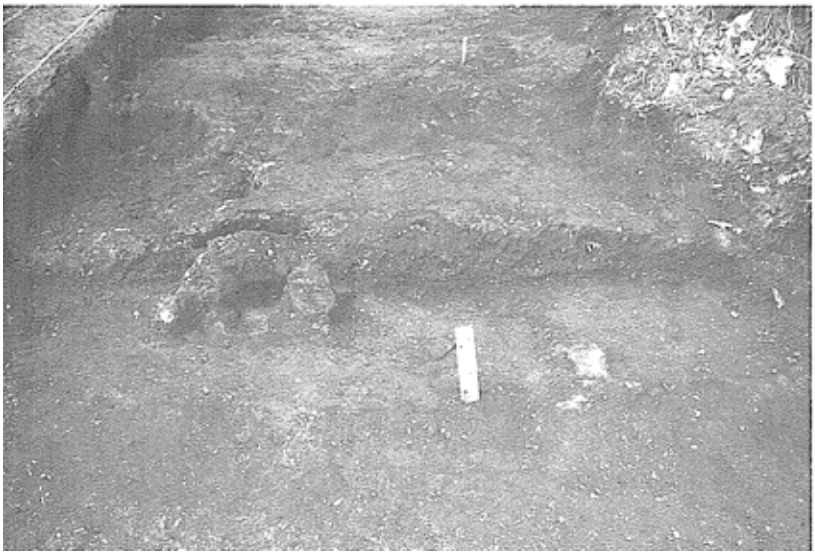
石　核

図版 4

新浜B遺跡近景



東西セクション



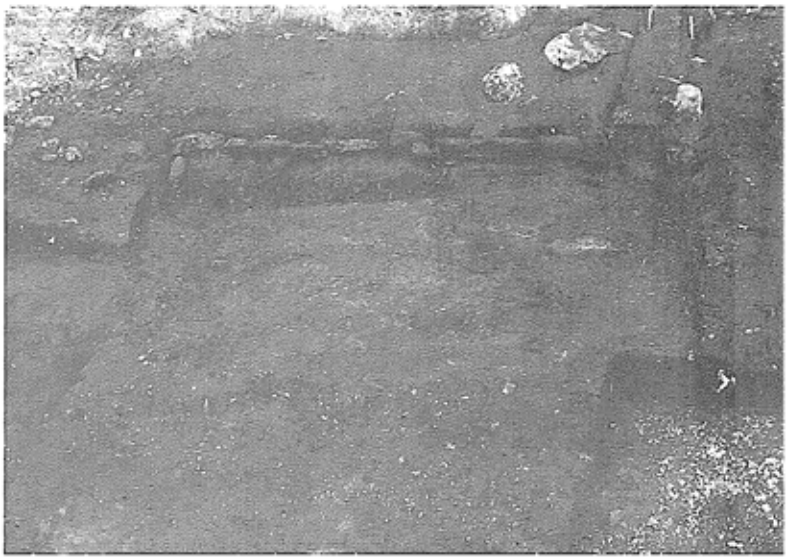
第1号住居跡

図版５

第２号住居跡

第３号住居跡と第２号炉

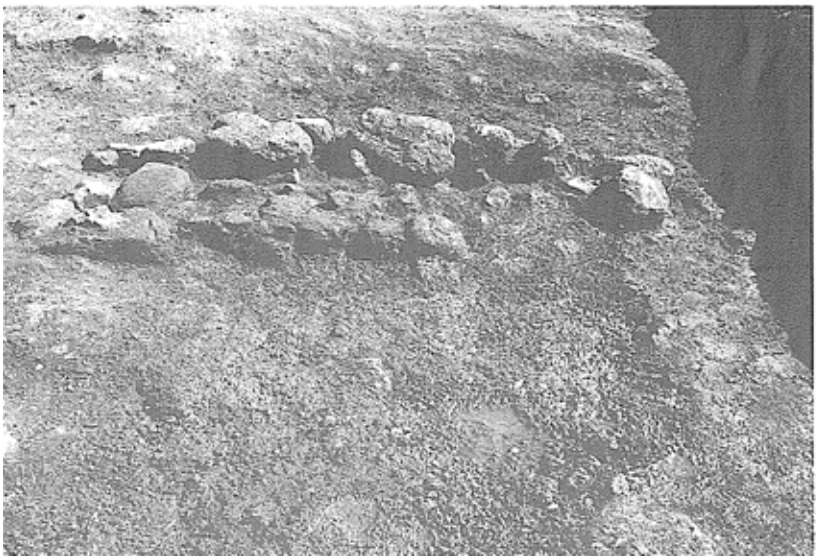
第 １ 号 炉



図版6

第 2 号 炉

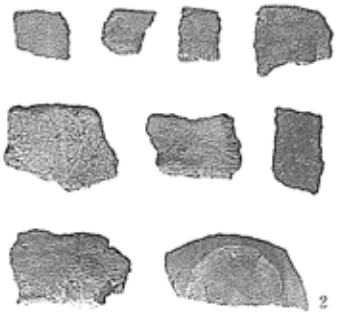
第 2 号 炉



第 3 号 炉

図版 7

1



2

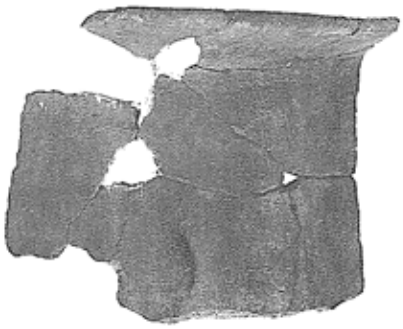
3

4

5

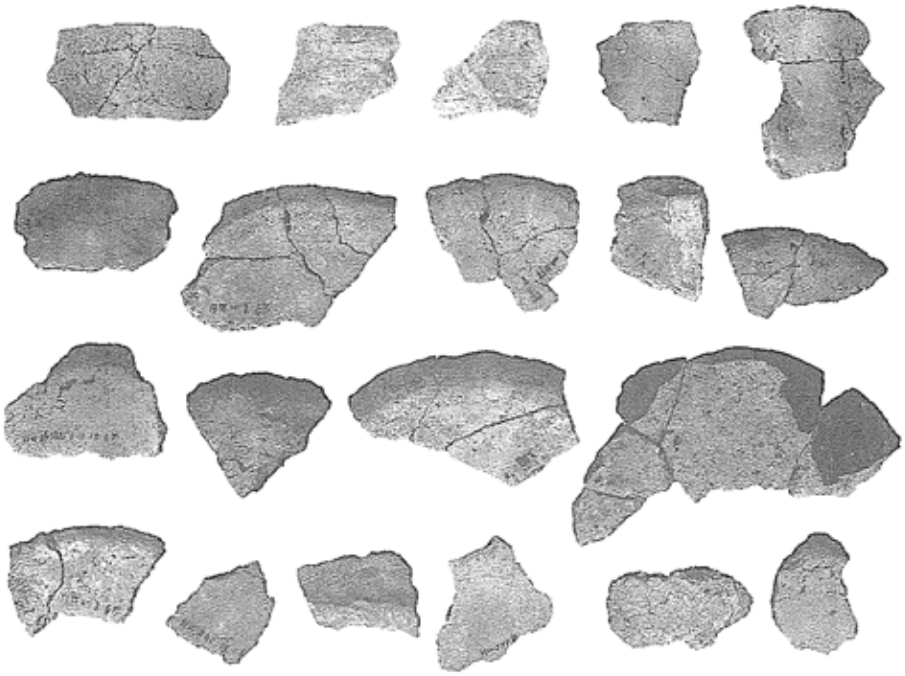
1・2　第2号竪穴住居跡出土遺物
3～5　第3号竪穴住居跡出土遺物

1



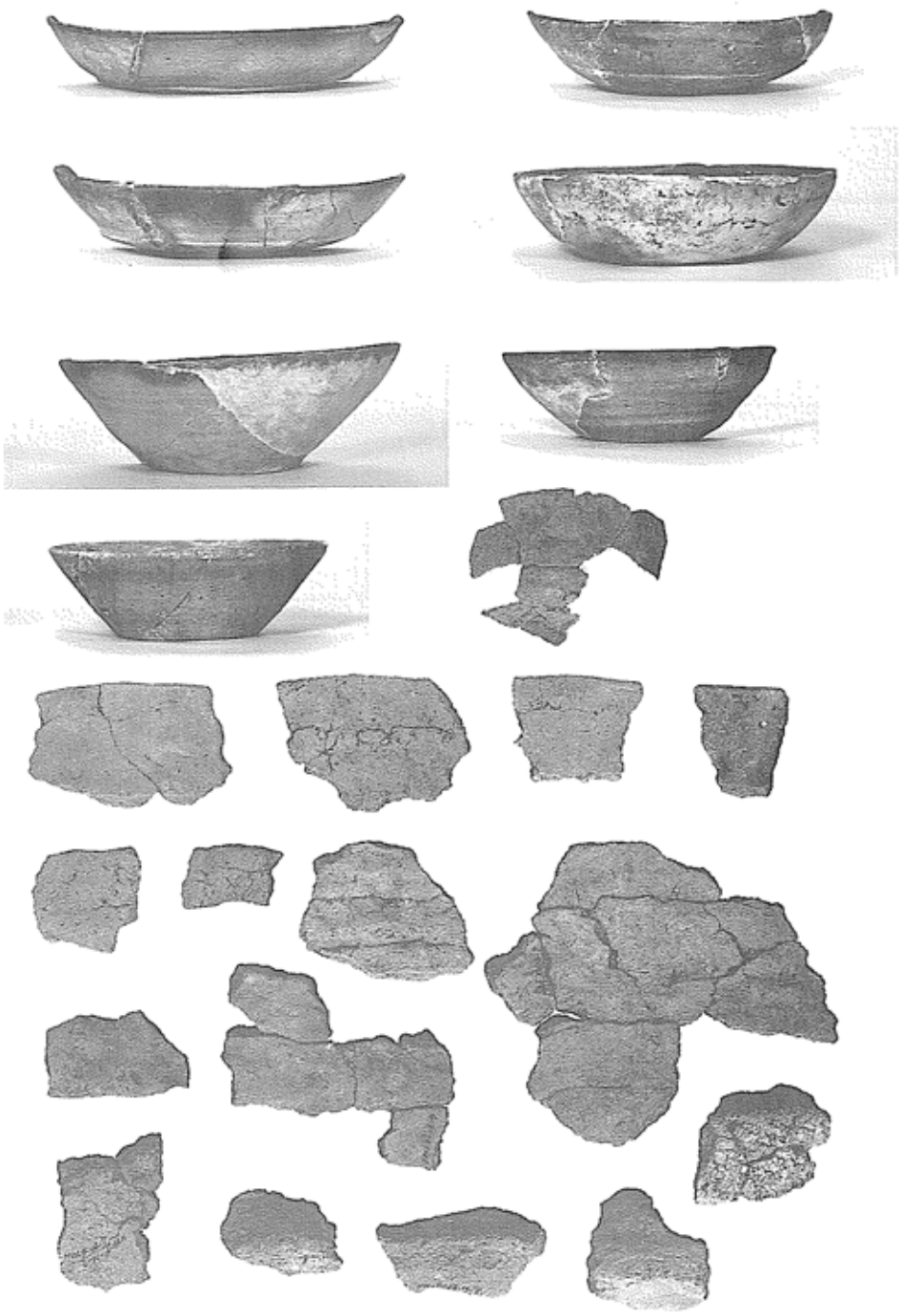
2

3

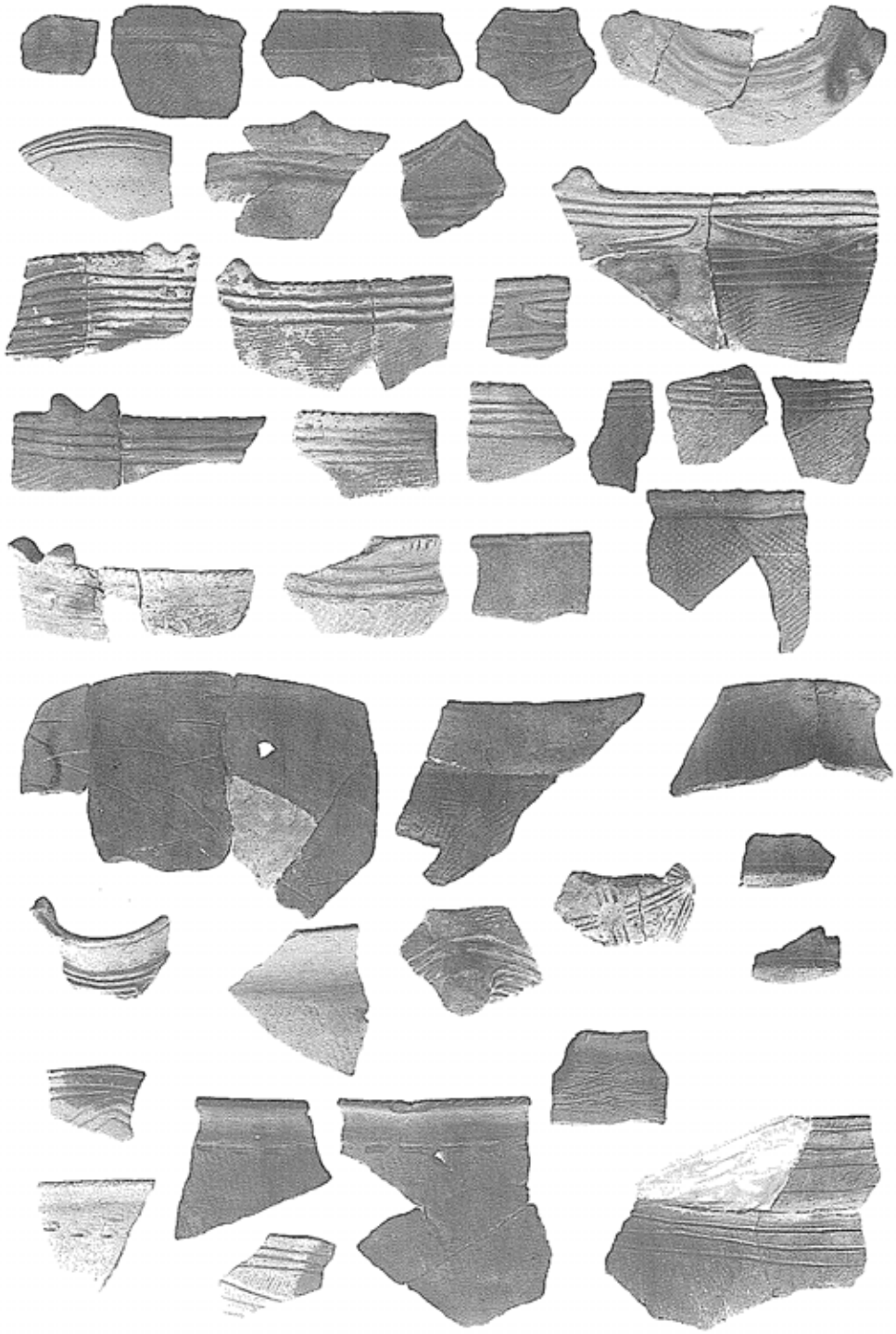


4

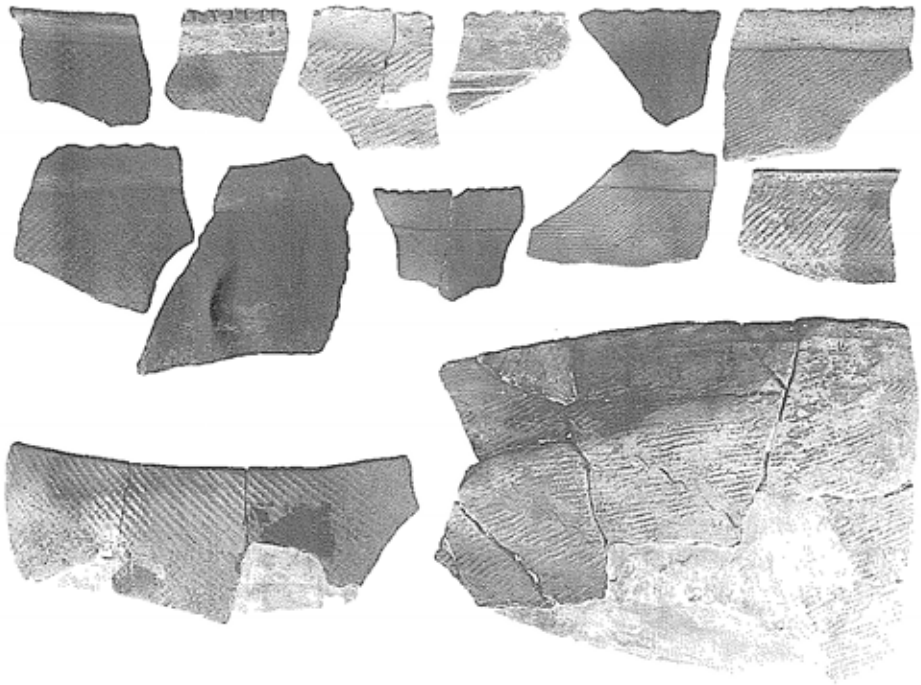
1．第３号竪穴住居跡出土遺物　３・４　第２号炉跡出土遺物
2．第１号炉跡出土遺物



堆積層出土遺物



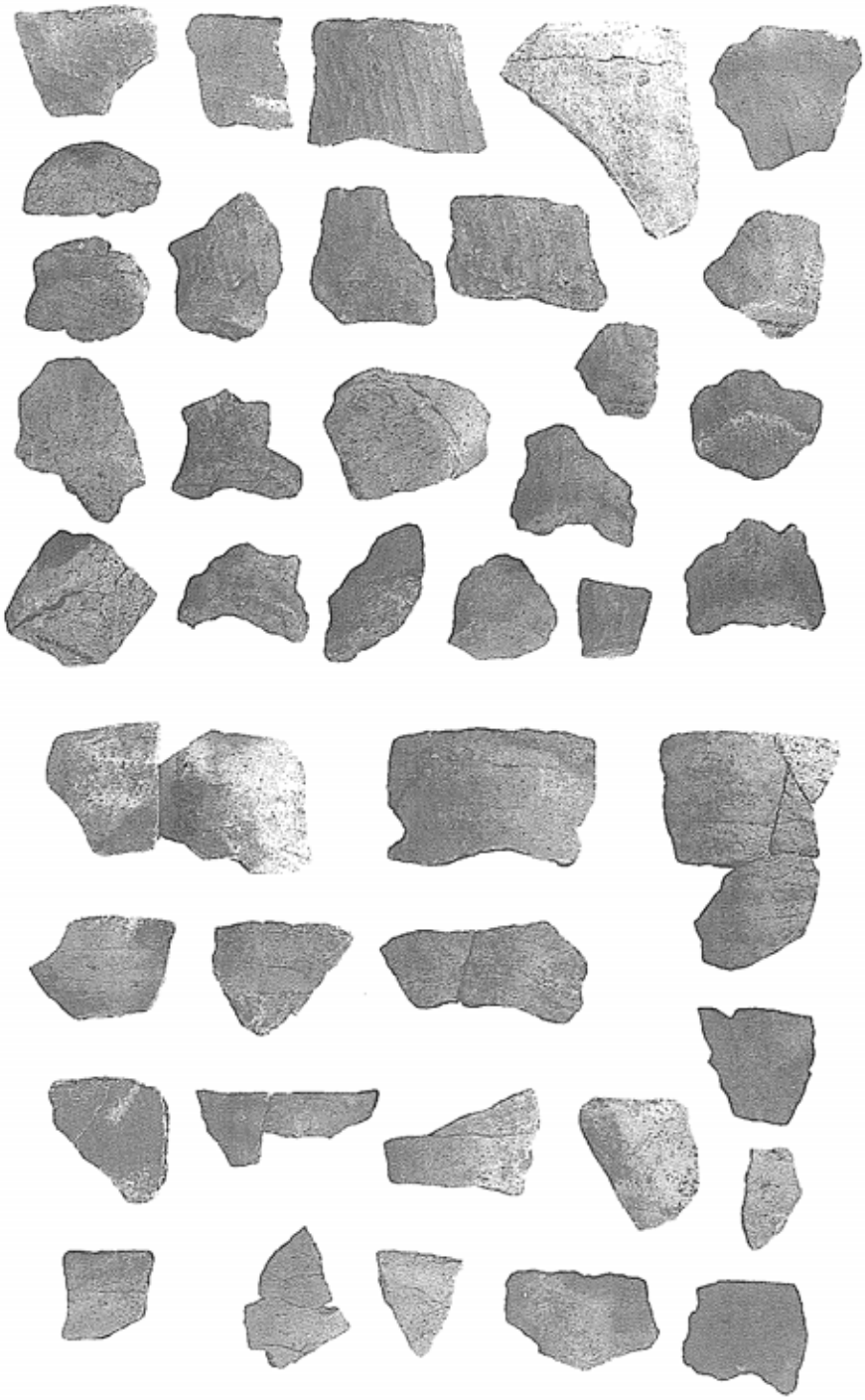
堆積層出土遺物



裏 底

製塩土器

堆積層出土遺物



堆積層出土製塩土器

図版13

1．　製塩土器
2～4．石器

堆積層出土遺物